

【朗報】 なんj民のワイ、  
バッドエンドを無事回  
避するwww

小野act3

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはオリ主のなんJ民がバッドエンド回避するまでのアニメ1〜12話の話です。

魔女「お前うまそうやな！ 食ったる！」

オリ主「お前が死ぬんやで！ 喰らえ即ハメボンバー！（必殺技）」

魔女「グエー、死んだンゴ」

こんな話のような、そうでないような（曖昧）

話はサクサクいくので、原作アニメ見てないと分からないと思います。

今の所作風はシリアス+ギャグみたいな感じですかね……

最初の方は普通の淫夢SSって感じだけど、後々バトル淫夢的展開にしていこうかと画策してます。

……なんJ民の主人公とか、これ誰が見るんですかね？

# 目次

1話 私の（インターネット上で）最低の

友達 ————— 1

2話 それはとつても絵面が汚いなって

『前編』 ————— 32

3話 それはとつても絵面が汚いなって

『後編』 ————— 59

4話 オッサンに夢の中で会ったような

…… (吐き気) 『前編』 ————— 89

5話 オッサンに夢の中で会ったような

…… (吐き気) 『中編』 ————— 107

6話 オッサンに夢の中で会ったような

…… (吐き気) 『後編』 ————— 136

# 1話 私の（インターネット上で）最低の友達

またこの天井か。

病院のベツトの上で、目を覚ました少女——曉美ほむらは思った。

これで何度目のループになるだろうか。何度も何度も時間を戻してきたが、まだまどかを助けられない。

「っ…………」

その状況にか細く、しかし苛立ちを隠せない声が出る。

何回繰り返しても結果は変わらない悔しさについて、唇を噛み締める。

「…………それでも構わない。どんなに悔しさを味わっても、最後にまどかが助かればそれでいい…………」

『ああ、これはうちの芸人のTですね…………』

いつの間にか電源が入っていたテレビでは、何回も見たニュースをやっている。

『これはあのDで、ああ、こっちはNだ。』

なんだこれは…………たまげたなあ…………』

ニュースでは売れっ子の芸能人3人が、インターネット上のエロサイトに自ら投稿していたという噂が話題になっていた。

そしてネットに写っている人物が芸能人本人かどうか、社長が今確認をして、本人だと認めればかりだった。

(例えば事実だとしても自分の所の商品なら、シラを切りなさい……)

あまりにも馬鹿げたニュースについてそう思ってしまう。というか呆れてる。

全く下らないニュースを一体いつまで繰り返す気だ。

虫酸が走る。

そんな物はもうどうでもいいという風にテレビを見るのをやめて、彼女はもう一度歩き出す。ずっと前から変わっていないたった一つの目的を果たすため。

『それではTさん、お気持ち表明をお願いします』

『社長だけには知られたくありませんでした。昔ビデオに出た事があり、今はとても後

悔しています。

当時は若く、このような事になるとは考えていませんでした。たった一度の過ちであり二度と同じ間違いはしません』

『でも、リリカルなのはは素晴らしいアニメです。これだけは真実を伝えたかった』



それから、ほむらは見滝原中学校の教室の外にいた。この日が、ほむらがここに転校する日だったからだ。

「柳生先輩は女の子ですか？ 男の子ですか？ はい！ 中沢君答えて！」

「えつと……どうでもいいんじゃないでしょうか……」

「そう！ 女も男でもどうでもいいんです！ みなさんも『男性器確認出来ず』、『こんな

おっさんが女の子な訳ないだろ！』なんて言って喧嘩しないようにね」

「辞めて下さい先生」（二重の意味で）

またそれか、と彼女は思う。

何回も聞いたここの担任の愚痴に、生徒とのやりとり。下らない。実に下らないことだ。

というかマジで朝っぱらから、しかも中学校で何を言っているの、ここの教師は……ほむらはドン引いていた。

「それと、今日は転校生を紹介します」

「そっちが後回しかよー」

ようやく教師が本題に入る。この担任はいつもこうだ。ほむらの顔には呆れとイラつきが感情が少し浮かんでいた。

「暁美さんいらっしやい」

担任に呼ばれ、顔の表情を無表情に戻してから教室に入る。

「それじゃあ暁美さん自己紹介して」

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

えらく短い自己紹介にクラスメイトは驚いているが、私はこいつらと馴れ合うつもり





心ここにあらずといった様子で彼女は返事を返したのだった……

「ですが柳生先輩については、1919人の学者が研究してきましたが、未だに謎は深まるばかりです。そもそもおはぎがその正体だとか実は赤ん坊だとも言われていますし――



授業が終わり、ほむらはクラスメイトから質問攻めを受けていた。

「ごめんなさい……少し気分が悪くなって……保健室に行つていいかしら？」

「保健室行く？」

「そうね……係の人呼んでもらえるかしら？」

「なんや、具合悪いんか？ 大丈夫かいな？」

ほな、ワイが保健室案内したるわ。ワイ一応保健委員やしな。しょうがねえなあ（ウ

ザキヤラ）」

「えっ……ええ……分かったわ……」

そうしてほむらは戸惑いながらも数人と一緒に教室の外に出る。

普段はお喋りな数人もこの時は、彼女の体調を考慮して、静かにしていた。

教室を出て、あまり人のいない廊下に来ると、ほむらは歩くのをやめる。

「お？ 暁美さん。保健室はまだやで？」

「……南 数人」

「ほ？」

（改めて聴くとい声しとるなあ、綺麗な声やわ。大人のお姉さんっぽいな）

「あなたは一体何者？」

「え？ ……何者いうたかて……ただの一般中学生や」

ほむらは数人をイレギュラーと認定し、何者なのか警戒していた。

敵ならばどう処分するかと思ひ、また一般人であつても余計な事はしないで欲しいし、魔法少女の世界に首を突つ込む事もやめて欲しい。

「そう……あなたは一体何処から来たの？」

「何処から来たあ？ あー、この関西弁が気になるんか？ ワイは小学3年の頃に大阪の摂津から引越してきてな。それからずっとこの群馬におるんやわ」

「そう。魔法少女、魔女、インキュベーター……これらに聞いた覚えは？」

「え？ 魔法少女？ インキュベーター？ ……なんや、暁美さんもリリカルなのは見てるんか！」

「……」

全然予想と違う答えに「こいつ……何も知らないの……？」という顔で、ほむらはついでに言葉が出なかつた。

「最初は魔法少女モノなんておもてたけど、見始めると意外とこだわつた設定、勢いのあつた演出に惹かれてな！ ん？ ……アレ？ でもインキュベーターってなんや？ もしこれから先のネタバレなら「南<sup>みなみ</sup>数人<sup>かずひと</sup>」

アニオタ特有の「あいつ○○の話になると早口になるよな」「やめなよ」現象を引き起こしてしまっただなん丁民の屑。

「あなたが何者かはまだ分らない。

でもあなたがもし、魔法少女のことを知ったなら……その世界に関わってはいけない。私にもこれから関わらないで。

そして鹿目まどかに軽々しく無責任な事も言わないで頂戴。

もし今言ったことを破ったらあなた……死ぬことになるわよ」  
そう言っただけは去っていった。

「……」

かずひと  
数人はさっきのほむらの言葉に絶句していた。

（ワイ、なんかやってもうたやろか……）

厳しい目で見られて、怒るように喋ったな……

関わらんといてまで言われてもうた……

悲しいなあ……（諸行無常）

（男で魔法少女モノ見てるのがアカンかったやろか……）

いやでもさっき自分から魔法少女の話持ちかけてきたのに……

んにやび……まあ、そう……よく分かんないですね……）

(せや！　もしかしてこの関西弁が癩に触つてもたんかなあ……？)

まあ、関西弁は結構毛嫌いする人も多いから、しゃあないか……)

「しようがねえなあ(悟空)　これから曉美さんと話す時は、標準語で喋ろうか……」

数人は一人しかいない廊下でそう呟いた。

彼女が気分が悪いといって教室を出たことなどどうに忘れていた……

幸と言うべきか、そんな出来事も他の生徒には伝わっておらず、向こう側の廊下から歩いてきた女子生徒達は楽しそうに喋っていた。

「でねー！　昨日見たホモビがねー！」

「うっそ、それマジイ？」

やだ、やめてよ蘭子そんな汚いの

「うわッ、何それ!?」 転校生ってそんなキャラだったの? 文武両道で才色兼備かと思いきや実はサイコな電波さん。くー! 萌えか? そこが萌えなのかあ!」

場所は変わって、なんでも実況民の数人は放課後に、シヨツピングモールに来たまどか、さやか、仁美と一緒に飲食店の中で喋っていた。

「いやー、でも暁美さんなんか怒ったようやしなあ……」

（やつぱり男が魔法少女見ちゃ） いかんのか?」

「大丈夫だよー、好きな物くらい自由に見ても。……私も見てるから（ボソツ）」

「えー!? まどか、まだ魔法少女モノ見てたの!? もう、可愛いなあまどかは!」

「ふえええ!? さやかちゃん聞いてたの!」

「なんや、まどかも見てたんか! 今度一緒にワイと見ようや!」

「ふえ!?! か、カズ君とは……ちよつと……」





「えっ!？」

ふつうに笑っているのだが、草生やしてるせいで完全に煽っているようにしか見えな  
いJカス民。

「アツハツハ、夢って……アツハツハツハツハ！ まどかは面白いわアハハ……い  
やー、もうお腹痛いわハハハハ」

「それ多分、因果関係なんだわ。時空を越えて巡り合った運命の仲間なんだわ」

「もう、まじめに話してるのに……皆酷い」

「でも、本当に会ったことがあるのかもかもしれませんわよ。」

まどかさんが覚えていらつしやらないだけで。夢は無意識の中にあるものを整理し  
た物を見ると言いますし」

「はえへ……深層意識って奴やろか。」

ワイも一回夢の中で可愛い女の子と会ってみたいもんやなあ……いや、エッチなお姉  
さんの方が……（小声）

「もう！ カズ君！」

「いやー、やっぱ数人は馬鹿だわ」

「まあ、数人さんつたら……」

シヨッピングモールということもあり、数人達4人以外の周りの話も盛り上がっていて、シヨッピングモールは活気に満ち溢れていた。

「んでよー、職場でこっそりビデオ見てたんだけどさー、音量調整忘れちゃってさー、大音量で『イクスギイ！ イクイクイクイク』……って言うのが流れちゃってさー」  
「ウツソだろお前wwwwww俊彦お前やっぱ馬鹿だわwwwwww」



フードコートで十分話を満喫した後、仁美は稽古があり先に帰ったが、残ったまどか

達はCD屋に居た。

今もまどかときやかかはヘッドフォンで音を聞き、音にノッていた。

しかしなんJ民の男子、かずひと数人は暇していた。

（でも、ワイもうスマホ持つとるからなあ……二人には悪いが、あんまり興味ないなあ……）

スマホは最近流行り始めたが、これからガラケーみたい国民全員の必需品レベルになるじやろうな。

それも仕方ねえか……所詮CDは先の時代の……敗北者じゃけえ）

（やめやめろ！）

（!?!）

心の中で独り言を言っていると、それに反応するように声が聞こえてきた。心の中にだ。

（助けて……まどか……）

（なんやこいつ!?! まどかを呼んどる!?! 誰が語りかけてきてんのや!?!）

まどかを呼んだ声とは別の「やめやめろ！」は早速無視されてしまった。

「呼んでる……私を……行かないや！」（使命感）

そう言ってまどかは走り去って行ってしまった！

「フア!! おい、まどか! どこ行くんや!」

「まどか!」

それを見ていたさやかと数人かずひとも慌てて追いかける!

「近野こんの、お前の事が好きだったんだよ!」

「先輩!! やめて下さいよ!! ……だって僕はトカゲで、あなたはライオンなんですよ!!? それに僕はもう……」

結婚して一年、大好きだった彼と再会してしまったトカゲの近野。

「結婚したのか……? 俺以外の奴と……」

「今夜は……帰したくない……」

「うわっ、立ち入り禁止区域やん……こここの扉開けられとるし、まどかが入っていつてもたんやろなあ……悪い子やわ、見つけたらお仕置きせんとあかん……グへへ……」

「数人……今のあるた気持ち悪いよ……」

「目が野獣みたいになってるし……」

「さやかとなんかス民の男子、数人はショッピングモールの奥、

立ち入り禁止区域の所まで来ていた。薄暗い所で、全く人気もない。

「野獣みたい!? そりゃいかな、犯罪者と一緒になるなんてアカン」

「犯罪者?」

「そんなことよりはよまどかを連れ戻さな」

「そうね!」

奥へ進むと、白いぬいぐるみみたいなもの抱えたまどかとあの暁美さんがおった。  
……なんで？ 暁美さんがここに？

……つて、なんか白いぬいぐるみはかろうじて息しとるけど、血だらけやん……

暁美さんが拳銃みたいなん持つてるし、なんか焦げ臭い匂いするし、映画で見た銃弾の跡みたいなものまである……

……ハハツ……うせやろ……認めたくないけど……アレは本物かいな!?

……ということは、もしかしたらワイらも撃たれるかも分からん！ ワイは特に暁美さんに嫌われとるみたいやし……

あ、アカン……どうしよう……怖くて動かれへん……

撃たれる。殺される。この二つの言葉だけが頭の中を支配していた。数人は生まれ  
て初めて思考が真っ白になる程、恐怖していた。かずひと

悪寒がする。呼吸も荒くなり始めた。涙も出てきたし、体がしんどくなってきた。逃げたい。一瞬でも早くここから立ち去りたい。

怖いのに、恐怖している故にその場から動けなかった。

「あの転校生、まどかを殺す気なの!？」

一方さやかは何か使える物がないか探すと消火器を見つけると、  
「これなら！」

さやかは消火器を持ってほむらに吹きかける。

「まどかこっち！」

「さやかちゃん！」

「……」

数人かずひとは目の前で目まぐるしいことがあってもなお放心状態であったが、

「数人かずひとも早く!!!」 「カズ君!!!」

「!!!」

二人に名前を呼ばれ、ようやく我に返る数人かずひと。

そこから二人を追いかけ、一心不乱に走り出した。

そして、ほむらから一時逃れることに成功したが、やがて魔女の結界が全員を包み込み、みつつあった。



……二人に呼ばれて、ようやく助かったわ……

今ものすごく安心しとるけど、悔しさもすごいわ……

……ワイはただ震えてただけやのに、さやかは怖がりもせず、まどかをすぐに助けた

……

……何も出来んかったなあ……ただビビってただけやった……

……あかん、無力すぎる……何してたんやワイは……

情け無い……なさけなさすぎる……

ワイなんて掲示板でイキって他人を見下すしかしてなかった……

……そんな雑魚が現実でなんの役に立てるやろか……

……現実でもただ友達と遊んだり、ゲームしたりして平凡に生きとっただけやけど、

それはさやかだって同じや。

中学生だから、死の恐怖を味わったことないからなんて言い訳は通らん……

自分のちっほけさ、クズさを思い知らされたわ……

安心感と自分の情け無さに涙まで出てきたなあ……

「うわ!? ちよっと、あんた、めっちゃ涙出てるじゃない、





走りながら、そう話していたら、なんか辺りがショッピングモールじゃない変なところになってしまった……

「ファ!? なんやこれ!?

しかも周りには綿で出来てて、髭生やした生物みたいなのがぎょうさんおる。たまげたなあ……

『Bild Cle……Bild Clemes……(画像クレ……画像クレメンズ……)』

『Niichan, spielen Sie nicht……(その兄ちゃん、糞遊びしないか……)』

なんか喋つとる……ええ……夢でも見とるんかこれ？

だってこんな現実にありえない光景……

ん？ お？ 現実にありえない？ ……

ということとはこれは二次元やつたんやな！（中学二年生特有の発想）

じゃあこれはジュエルシードの仕業かな？

なんかそう思うと急にワクワクしてきたな！

多（^）（^）↑（拳銃とかは駄目なのに、相手がマジカルな見た目してると、アニメ

かなにかだと思つて楽しんでしまうタイプ）

じゃあ時空管理局とかきてくれんのかな!?

あ〜〜良いっすね〜

フエイトちゃんこの目で見てみたかったんや！ 可愛いし！

でもクロノもええなあ！ 冷徹みたいなこと言っておきながら、ちゃんと他人の心を理解してくれてんのも、クーデレって感じでカツコええ男や！

申し訳ないが淫獣ユーノ君はNG。



主人公がそんなことを考えていると、髭みたいなハサミを持った生物が3人に迫る。

『Mein Onkel liebt sie Kinder wie dich!』

(おじさんはねえ、君みたいな可愛い子が大好きなんだよ!』)

『Ah ~ Es fhlt sich so gut an, dass ich mich danach hle (ああ ~ めちやくちやに切り刻むと、気が狂うほど気持ちが良い)』

「ヒツ・!?!」

まどかとさやかは恐怖して互いの体を抱きしめるが……

「おくと、お前ら、一旦落ち着こうや。そんなもん振り回してても、何にもならん。話せば分かる。偉いお人もそう言っておるんや。」

とりあえずそのハサミをしまおうやないか」

二次元だから大丈夫だろなんてよく分からない理論で怪物に近づくなんカス野郎。

「……しまつてくれんか? しまつて下さいオナシヤス!

センセンシャル!」

だが流石の彼もちよつと話を通じない相手なんだろうかと思いはじめてきた、その時。

目の前の怪物が吹き飛んだ。

『Entschuldigung! (オオン!)』

「……………フア!？」



「危なかったわね。あなた達。でももう大丈夫よ」

振り向くと、金髪のドリルの髪型のお姉さんがおった。

キュアハッピー（変身前）の色違いかな？

それにしてもデカいな（主にアレが）ふーんエッチじゃん（越前リョーマ）

「あら、あなた達がキュウベえを助けてくれたのね。ありがとう。是非お礼をしたいと

ころだけど……………」

「でも……………その前に……………一仕事片付けちゃっていいかしら」

そう言いながら、巨乳お姉さんは変身する。

……………フア!? なんやこれは!？」

マジでリリカルなのは!?! でもデバイスは!？」

そして巨乳お姉さんは飛び上がると、周りに大量のマスクット銃が現れた。……………衛宮

士郎かな?（思考停止）

そして、その銃から大量の玉が発射され、無事怪物共は全員消え去った。

はえへく……すつごい。(憧憬)

見れば、まどかときやかもおんなじように憧れの目線で見とつた。こんなん見れるんアニメの中だけ思ってたからね、しようがないね。

戦闘が終了した後、変な空間が戻る。

でもそこに現れたのは――

(あ……暁美……)

そう、暁美やった。また再びワイにあの時の恐怖が蘇りそうになる。

でも今度は手を握り締め、手の爪を肉に食い込ませて恐怖を耐えた。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいなら、すぐに追いかけなさい。今回はあなたに譲ってあげる」

「私があるのは……」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの。お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいとは思わない？」

「……っ……」

巨乳さんにそう言われて、暁美は帰っていく。

暁美がいなくなり、またついホツとしてしまった。

……学校にいた時は嫌われても「関西にもいい奴はおるんや、なんとかしてそれを伝えたる」と意気込んでいたのに、随分浅ましくなったもんやなワイは……

初めて見た時、綺麗だと思っていた髪と声は、もう恐怖の対象としか……ん？ しかし、さっきの光景、よく思い返してみれば、おかしくないか？

まどかがこの立ち入り区域に入って、暁美と何か話しとつた時の話やが、普通なら暁美はまだかに銃を向ける筈なのに、それをせず何か話しとつたみたいやな……

急いだり、ビビツとつたりしとつたから、何を話してたかは分からんけど……

……なんで、暁美は銃を向けてまどかを脅したり、まどかを撃つ準備もせず、呑気に話しとつたんや？

もしかして、人間は撃たんとか……

そう思っていると、乳さんが話しかける。

「あら、その制服、あなた達も見滝原中学校の学生かしら？」

「あなたもですか!？」

はえへ……いや、こんなおっぱいで中学生は無理があるでしょ。

「カズ君、鼻の下伸びてる……!」

「いてててて!!?」

スケベな視線を向けていたせいで、幼馴染のまどかに耳を抓られる。イタイイタイなのだった。

「改めて、キュウベえを助けてありがとう。」

私は見滝原中学校3年生のバマミよ」

デカパイさんはそういう。

どうやらホルスタインさんの名前はバマミらしい。

「はえへ……巴さんかあ。よろしくニキーwwwwww」

そこで、その白いの(適当)は?」

「僕はキュウベえ。君は僕が見えるのかい?」

本来は中学生の女子にしか見えないはずなんだけど」

「フア!? 喋りおつたでこいつ!」

この、汚いなんJ民みたいな顔した白い動物はキュウベえ言うらしい。

「こいつ売り飛ばせばどんだけの金が返ってくるやろ……」

楽しみやな……デュフフフwwww

「駄目! 絶対駄目だから!」



「私にとってキュウベえは友達なんだから、売っちゃ駄目よ？」

とんでもない速さでキュウベえを抱き抱えるまどかと、苦笑いする巴さんに止められる。畜生。それにしても羨ましいなあキュウベえ。

まどか、汚いなん丁民抱きしめるくらいなら、俺を抱き抱しめくれやんかな。なくんて。

「へ〜……そうなんか？」

なんで女子中学生しか見えへんのん？」

「素質がないからだ。」

中学生の女子は最も感情の増幅が激しいからね。

……だが、調べてみた所、君にも素質を感じる。

感情の起伏も普通と比べて激しいし、君の周りの関係による因果も凄まじいものだ」  
「へえ〜……中学生が感情激しいってか……」

ん？ 周りの因果関係……

それって……」

（もしかして……なん丁で日々様々な奴とレスバしてるからじゃ……）

「それで本題に入るんだけど、まどか、さやか、数人<sup>かずひと</sup>。三人にお願いがあるんだ」

「ほ？」

「えっ？」

「お願いって？」

「僕と契約して魔法少女になってよ！」

「駄目です」

続  
く

## 2話 それはとつても絵面が汚いなつて 『前編』

（『でも……その前に……

一仕事片付けちやっていいかしら』

夢の中で少女が摩訶不思議な術を使っていた。

（『テイロ・ファイナーレ！』

そして少女はあつという間に、怪物共を消し去ってしまった。

（『私はバママ。キュウベえと契約した……魔法少女よ』

—————  
数人<sup>かずひと</sup>の夢はそこで覚める  
—————

「はあく……（クソでか溜息）」

まさか中二男子になってこんな変な夢見るとは……リリなのの見過ぎですネクオレ  
ハ……」

そうして数人<sup>かずひと</sup>はお手洗いにっこうとするが

「おはよう！ 数人<sup>かずひと</sup>！」

なんと数人<sup>かずひと</sup>の部屋にキュウベえがいた。

「フア!!!」

あまりにも驚き過ぎた数人<sup>かずひと</sup>は自分の住んでいる514階の窓からキュウベえを素早く放り投げた。



時間はキュウベえを放り投げる1日前に戻る。

前回、マミに助けられたその後、ついでにマミの家にまどか達は寄つていく途中の事。

さやかが数人かずひとに尋ねる。

「ねえ、さつきキュウベえに『魔法少女になって』って言われて即答で拒否してたけどなんでなの?」

「当たり前だよなあ?」

「さやかお前……何言われたか分かつとるんか? 魔法少女やぞ魔法少女。魔法使い

とか魔法少年ではなく」

「そんなもん男がなったらクツソキモい衣装着ることになるがな」

「それもそうね……」

「大丈夫だよ。」

魔法少女の衣装は自分の意思《ゴオオオオオオ!!》(爆音神風君)」

「……………」

クツソでかい風の音に阻まれ、アピール失敗に終わるキュウベえ。

「え? なんて?」

そうこうしてる内にマミの自宅のマンションに着き、マミはマンションを指差す。

「ハハハハ」

「はえへく……すつこいおつきい……」



マミの住んでいる部屋の周りからは楽しそうに話す声も聞こえる。

とおや  
遠野 「今日は本当疲れましたよー……」

とおや  
どうやらこの遠野という男、マミの隣の住人の部屋に遊びに来たらしい。

のけもの  
野獣 「ねー今日練習きつかったねー」

マミの隣の部屋の住人、野獣のけものが喋る。

最近有名になってきた水泳選手であり芸人も兼任している芸能人、芸名「コカコーラ南島」の顔と野獣のけものの顔はよく似ていた。

遠野 「ふあい……」

疲れた様子のバンドウイルカ。

「まあ大会近いからね、しょうがないね」

他の住人はそんな平凡な日常を過ごしていた……



そして魔法少女達は階段を上がり、マミの部屋の前まで来ていた。

「ここがママさんのハウスですか」

なんJ民こと数人かずひとがそう言う。

女の子の家に入るといふ事で何処となく嬉しそうだ。

そしてママが扉を開ける。

「ええ。入って、どうぞ」

ガチャン！ ゴン！（扉の音）

「あつ、おじゃましまーす」

「家の中だあ……」

そうして3人とも家の中に入っていく。



ギー、ガッタン！（迫真の演技）

「↑良いわよ上がって↑」

あまり今までなかった他の人を家に招き入れるという経験に緊張したのか早口になるミミ。

「あつ……すいません」

そうして3人が中に上がっていく。

「わく、綺麗く……」

「はえへくすつごい大きい……」

ミミの家の中は物が綺麗にまとめてあり、一人暮らしにしてはかなり大きい部屋だった。



野獸のけもの 「今日タアイムはどう？ 伸びた？ 伸びない？」

野獸 「緊張すると力出ないからね」

遠野 「そうなんすよね……」

野獸 「管野美穂くだのみほ（意味不明）」



そして現在、マミは3人に紅茶とお菓子を振舞っていた。

「めっちゃウマっすよマミさん！」

「うん！ 美味しい！ やっぱ……マミさんの……料理を……最高やな！」

さやかと数人かずひとが嬉しそうにマミに話す。

それに対し、マミも嬉しそうに礼を言う。

「うん、ありがとう」（ティロキチお姉さん）

「マミさんもうまそうやなくホンマ」（ネットリ）

そうほざくなんカスの数人かずひと。

「まあ、そんな、ちよつと……冗談はよしなさい」

冗談はよしてくれ（幻聴）

「カズ君！」

「ンア——!!!」

またもやまどかに耳を抓られるなんカス。

残念だが当然だ。



野獸のけもの 「まずうちさあ、屋上……あんだけど……（コカコーラ南島）」

大家でもなく借りてる住人の分際で勝手に、禁止されてるマンションの屋上をしようとする屑。

遠野 「はえ〜」

野獣 「焼いてかない？」

遠野 「あ〜いいつすねえ」

良くはない。



「さてと、それじゃあ魔法少女について話しましょうか。

キュウベえに選ばれた以上、あなたたちにとつても他人事じやないものね」

ママが本題を切り出す。

「うんうん、何でも訊いてくれたまえ」

さやかが主人公より面白い事を言う。

「さやかちゃんそれ逆だよ……」

そして場が和んだ所でマミがソウルジェムを出す。

「これがソウルジェム。キュウベえに選ばれた女の子が、契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」

チュートリアルをマミが説明する。

（ファ!? デバイスちやうやんけ!）

やっぱリリカルなのはじゃなかったんやな……）

当たり前だよなあ? いくらファンタジーなことが起こったとはいえ現実を二次元かなにかだと錯覚する人ってイカれてるんですかね?（辛辣）

（そういえばソウルジェム……魂の宝石かあ……魂でも入つとるんかな? なんてな）

せっかかないとこ行ったのに、やっぱり台無しにする主人公<sup>無能</sup>。

「それにしてもクツソ綺麗な宝石やな……」

一体何で出来てんのや?」

（この宝石余つてたら高値で売り飛ばせるやろか）

心の中で畜生発言をかます主人公<sup>カス</sup>。

なんカスの質問に対し、キュウベえが答える。

「さつきマミが召喚していたマスケット銃とおなじように、魔力で構成されてるんだ」

「はえ、〜」（全然分かってない）

そんなことをほざくキュウベえ。

キュウベえは汚いなんJ民。なんJ民はホモ。ホモは嘘つき。つまりキュウベえはホモの嘘つき。

そしてホモとはホモサピエンスであり、人間の事。つまり人間全員嘘つきであり、キュウベえは人間だった……？（謎理論）

（魔法ってなんでもありやな。確かに銃が突然出てきたし、『魔力』で説明できるもんなんやろな。原理全く分からんし）

「それで本題に戻るけど、この石を手にした者は、魔女と戦う使命を課されるんだ」

「え？ おジャ魔女？」

「魔女？ 魔法少女とは違うの？」

「願いから産まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから産まれた存在なんだ。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望をまき散らす」

「んにゃび。その、よく分かんないです……（無能）」

「もつと具体的に説明して、どうぞ」

「う〜ん。魔女の存在と魔法は人間の科学ではとても説明出来ないものなんだ。だから

これ以上説明しろと言われても困るよ」

「そもそも人間が理解出来る物が物理的な物に対して、魔女と魔法の存在は神秘に満ちたもので、とても曖昧なものなんだ。

今だって魔女の習性、特徴くらいしか僕らには分かかっていない。君が分からなくてもしょうがないよ」

ホモは嘘が上手い。

「そんなもんなんですかねえ……（臆気）」

無能な主人公なんカスの代わりに上手く話をまとめた裏ボスキユウベエ。

そしてマミがそれについて言い足す。

「理由のはつきりしない自殺や殺人事件も、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ」

マミが変身したり、銃を召喚してしかも射撃したことや、怪物が突然現れただけでももう全く説明のつかないものだった。

なのに更に意味の分からない呪いや結果と言われ、混乱するダメダメなん丁民の  
数人かずひと。

(あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
リブリュリュリュリュリュリュリュ  
!!! ブツチチブブブチチチブリ!!!  
!!!!!! イリブブブ

ブウウウウツツツ!!!!!!  
(

心の中でつい発狂してしまう。

「魔女なんていうヤバイ奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの?」

半分ショートしてる数人かすひとに代わり、質問をするさやか。

その質問にキュウベえが答える。

「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、絶対に人前には姿を現さないからね」

そしてمامィもキュウベえの言葉に同乗して言う。

「結構、危ないところだったのよ。あれに飲み込まれたら普通は生きて帰れないもの」

「なんでمامィさんはそんな所に……?」

正気に戻り、話を聞く数人かすひと。

さつき結界に居た時はバーチャル空間か何かなのかと思いちよつとはしゃいでいたが、今思い返すと体が震えてくる。

——もう、死ぬんじゃないかっていう思いを、恐怖を味わいたくはない。



「暁美にも、魔女にも永遠に関わらなければこのまま一生痛い思い、怖い思いを味わうことなく過ごせるんじゃないだろうか。」

かずひと  
数人はついそう考えてしまっていた。

「そう、これは命懸けよ。」

確かにキユウベえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは、死と隣り合わせなの」

「ママのその答えに3人とも黙り込んでしまう。」

「どんなに美味しい報酬があつたとしても、誰だつて命がかかっているという条件が加わればそれをするのを躊躇うだろう。」

「そうして暗くなった場の雰囲気を変えようとして、ママが提案をする。」

「そこで提案したいのだけれど、三人ともしばらく私の魔女退治に付き合ってみないかしら?」

「「え!?!」」

「「フア!?!」」

「魔女との戦いがどういふものなのか、その目で確かめてほしいの。その上で危険を冒してまで願いたい事があるか、じっくり考えてほしいの」

「大丈夫、魔法の結界にいる時は私が守ってあげるから」

(ワイは……)

「……ワイは嫌です……」

かずひと  
数人は絞り出したような声で言った。

「え……」

「南君……そんなすぐに決めなくても良いのよ?」

「だって、魔法と戦えるのは魔法少女だけでしよう!? いくらママさんが守ってくれるとはいえ、万が一ということもあるんや!」

ワイは反対や!! そんなところ行ったら命落とすだけや!!!」

かずひと  
数人は死ぬ事に対しての恐怖から魔法の結界に入る事に恐れを抱き、ママの提案に感情的になりながら反対する。

「まどか、さやか。お前らもやめときや。こんなもんで無駄にすることはしない」

数人かずひとは2人の方を向いてそう言い放つ。そうして数人かずひとはまるで『これ以上話す事はな

い』という風に無言で鞆を持って立ち上がる。

「カズ君……」

「数人かずひと……」

数人の言葉に驚いている2人。

「まどか、さやか。はよ帰ろうや」

そして2人も一緒に帰るように催促する。

「待って」

しかし、まどかは数人かずひとを引き止めた。

「……カズ君……私は……マミさんについて行くよ」

「まどか!?!」

「だって……マミさん、悲しい顔してるもん」

まどかはその優しさ故にマミに同情し、マミの事を『なんとかしてあげたい』、そう思っていた。

「!! 鹿目さん……いいのよ……私の事じゃなく自分の事を……」

寂しげな顔をしながらも、また孤独になるであろう未来に耐えようとしてマミはまどかに気にしないよう言うが……

「それにキュウベえも危ない目に遭ってた。

私はそんな酷い事を見ないことにしたまま、自分一人だけ平和に過ごしたくないから」

その言葉に数人かずひとは動揺する。

「……まどか……」

（いつもお前はそうやった……普段は弱々しく見えるのに、他人が危ない目に遭つてるとそれを意地でも助けようとする……そういう時は誰が何言つても絶対意見は曲げへん……そんな所は変わつたらへんな……）

数人かずひとは今のまどかに何を言つても結局まどかの意思が変わらないのを知っている為、これ以上何も言えなくなる。

「……分かった。まどかがそういうならあたしも行く」

まどかの意見に同乗し、さやかもマミについて行くと言い出す。

「さやか……お前まで……」

「……」

かずひと  
数人は今とても苦惱していた。死ぬことは怖い。ものすごく。

だが、だからといって、まどかときやかという親友を置いていって自分だけのうのと生きるという選択肢も取れなかった。

「南君、あなたはどするの？」

「……」

しばらく沈黙していた数人だが……

「……分かった」

「どうしてもお前らが行くんやったら……ワイも………ついていったる」

「カズ君………！」

まどかが嬉しそうに数人かずひとを呼ぶ。

「ただし、二人とも、危ない事はするなや。戦いはマミさんに任せるんや」

「うん！」

「そりや分かってるって」

「大丈夫よ南君。あなたたちの命は私が必ず守るわ。保証してあげる」

「マミさん………」

マミさんがそう言ってくれるのは有難いが、実を言うと言つぱりそれだけでは安心出来ない。数人かずひとはそう思っていた……



その頃屋上では

遠野 「(誰かに) 見られないすかね……」

野獸 「大丈夫でしょ。ま、多少はね？」

遠野 「暑いっすねー」

野獸 「暑いねー。オイル塗ろっか」

大家 「おいコラ、お前何やってんだお前」

野獸 「あっ……大家さん……」

野獸 「すいません許してください！ 何でもしますから！」

大家 「ん？ 今何でもするって言ったよね？」



そして時間は1日たって、数人がキユウベえを投げ捨てた日になる。

「おはよ〜！」

仁美、さやか、ついでに数人が待ち合わせしている所にまどかがやって来る。そして4人は歩きながら学校へと向かう。

「おはよー！」

「おはようございます」

「オッハー！（一人だけクソデカ大音量）」

挨拶をしているところに、

さやかと数人が異変に気付く。

「……あれ？」

「おはよう！ さやか！」

「フア!？」

なんと数人が投げ落とした筈のキユウベえがまどかの肩に乗っかっていた。

ちなみに514階から投げ落としたので当然死体になってるかどうかは当然見えな



かったが。

「どうかしましたの？」

キユウベえが見えない仁美は不思議そうに3人を見ていた。

「……やつぱりあたし達にしか見えないんだ……」

小声でさやかがまどかに話しかける。

ちなみになんカスは驚き過ぎて固まっていた。

動きが止まっているなんカスに気付かず、女子3人は歩き出す。

「あつ、おい待てい（武士っ子）」

なんカス野郎もいつもの調子を取り戻し追い掛ける。



（頭の中で考えるだけで会話とか出来るみたいだよ）

4人が歩いていると、まどかからいきなりファミチキテレパシーがさやかと数人<sup>かずひと</sup>に伝

わる！

(フア!?)

(え!?)

突然念話バトルを繰り広げる魔法少女候補3人。

(何!?) あたし達もうそんな特技身に付けちゃったの!?)

(いやいや、まだ僕が中継してるだけだよ)

そう念話で伝えるキュウベえ。

(はえへ〜すつごい…………え? ていうかキュウベえ、お前なんで生きとるん…………真つ逆

さまに落っこちていった筈やんけ…………)

(地面に激突する直前に魔法を使ったからね)

(もうお前が戦えやそれ)

キュウベえとなんカスが念話をしてると迫真お嬢様が唐突に勘違いしだす。

「お三方ともどうしましたの？」

急にそわそわなさって…………」

そう言つて仁美お嬢様は驚いて鞆を落とす。

「まさか、もう目と目で通じ合う仲に…………!? でも3人ともということとは…………」

「もしやお三方はあの『3P』という間柄になつてしまわれたのですか…………!? まあっ

…………いけませんわ…………! それは禁断の…………恋の関係ですよー!」

そう言って走り去ってしまおう仁美。

……ヤクでもキメてるんですかね？ (辛辣)

「あつおい待てえ (両津勘吉) 仁美姉貴、肝心な物 (鞆) 忘れていつてるゾ……」  
「今日の仁美ちゃん、なんだかさやかちゃんとかズ君みたい」  
「どういう意味よそれ！」



それから魔法少女候補3人は教室に着き、仁美姉貴の誤解を解いて席に着席した所だった。

そして再び3人と一匹が念話バトル（略称ジャネンバ）をする。

（そもそもキュウベえ、あんたのこのご学校に来て良かったの？）

さやかがキュウベえに念話で尋ねる。

（どうして？）

（このクラスに、あの転校生がいるんだよ？ あんた転校生に狙われてたじゃん）

そう、このクラスにはほむらがいる。

さやかはその事を危惧している。

（そうだよ（便乗））

それしか言えないのかカス男。

（大丈夫だよ。ママもいるし）

『平気だ』という風に動揺せず念話するキュウベえ。

（は？ 何言うどんねん。ママさんは3年の教室におるからこつちの状況が分からんや

ろ。このサル。おいサルウ！）

数人かずひとにはキュウベえが汚いなんじ民に見える為、キュウベえの扱いが少々雑になつて

いるなんカス。

（安心して。ちゃんと聞こえているわ）

いきなりジャネンバに参加してきたママ。

(フア!?)

(あれくらい距離ならテレパシーの圏内だよ)

(はえ、く、テレパシー中継とかWi-Fiか何か? マミさんオツスおはようござい

ます、く)

(おはよう。)

大丈夫よ、あの子だって人前で襲って来るような真似はしない筈よ)

ちようど噂をすれば、実際にほむらが教室に現れ自分の席に着く。

「あ………暁美………」

かずひと

数人はまだほむらの事を恐ろしいと思っていたが、不思議と昨日程も恐ろしくは感じられない。

そして3人を見つめてくるほむら。

(大丈夫だよ、まどか、数人。かずひともしあいつが変な真似したらあたしがぶっ飛ばしてやる)

男の主人公なんかより頼りになるさやかちゃん。

(美樹さんは心配だけど、私がついているから大丈夫よ)

(心配っていうなく!)

そこでチャイムが鳴り、そろそろ授業も始まる頃だった。

「でよー、龍河とやってたらエイズにかかっちゃってさー」

「マジかよ、パールエイズってか」

「ハハツ、下らねーw」

「てか良雄<sup>よしお</sup>お前大丈夫なのかよ!？」

続く。

### 3話 それはとっても絵面が汚いって 『後編』

現在、まどか達は学校の屋上で昼食を取っていた。

そしてさやかが魔法少女の話の話を切り出す。

「ねえ、まどか。願いたい事、何か考えた？」

「ううん、全然思いつかなかった……」

「あたしも……いくらでも思いつくと思っただけだな……」

「数人は魔法少女にはなりたくないみたいだけど、叶えたい願いつてあるの？」

「ワイだって、偶にはたまらく願いが叶わないかなって思う事は沢山あるんや。でもそれは全部、命をかけてまで叶えるもんやないからなあ……」

「そっか……そうだよね……」

そう言っていると、階段から誰かが上がってくる。

「ツ!!! 曉美……」

そう、それは曉美ほむらだった。

固唾を飲んでその場から動けない数人に代わり、さやかほむらに話しかける。

「何？ 昨日の続き？」

「いいえ、そのつもりはないわ」

「南 数人」

「!! ……なんだ……いや、何だよ？」

数人はほむらが関西弁を嫌いなのだろうとまだ勘違いし、標準語で話そうとしていた。

「魔法少女に関わらないでと言ったのに……関わってしまったのね。」

まあ私はあなたが余計な事をしなければそれでいいわ。

もし死ぬ事になってもせいぜい後悔しない事ね」

「……」

ほむらの相変わらず冷たい態度に数人はこれ以上刺激させない方が良くと思い、黙り込む。

そしてほむらはまどかの方を向いて話し出す。

「キュウベえが鹿目まどかと接触する前にけりをつけたかったけれど……今更それも手遅れね。貴方も魔法少女になるつもり？」

「ほむらちゃん！ ほむらちゃんはどんな願い事をして魔法少女になったの？」

まどかは逆に質問を返す。



……いくら可愛いまどかとはいえ、質問を質問で返してはいけない（戒め）

「……」

まどかの問いに答えず、ほむらは帰っていく。

数人は昨日マミの部屋で、ほむらはマミやまどかを敵視しているのではないかという話を聞いたのを思い出す。

（やつぱり暁美は未だに怖い……怖いけども……）

（ほんとに暁美は敵……なんやろうか？）

いや、キュウベえを撃つた事は事実みたいやけど、なんでやろう、ワイらに対してあんまり憎しみを感じへんなあ……）

何故か、数人が恐怖を感じているのは拳銃のような武器だけで、あまりほむら本人の事を敵だとは感じていなかった。

ほむらがキュウベえ以外に攻撃を全く仕掛けてこないというのもあるし、心に余裕が出来たからかも知れない……

「茜！ 今日もホモビ、一緒に見ようよ！」

「蘭子……またアレ見るの？ 嫌よ、だって汚いし臭いもん……」

「え、分かってないなく、その汚くて臭い所が面白いわんじやん」

「蘭子……私達、女子中学生だよ？ もっと綺麗な物見ようよ……」

「う、うん、茜は嫌なの？ ホモビ」

「えっ……私は……」

「……い、嫌って訳じゃ……」

「で、でも全然あんなもの好きなんかじゃないからね！」

「そう……じゃあ仕方ないよね。」

好きじゃない物見てもつままないし」

「じゃあ今日は私一人でホモビ見るね。」

ごめんね？ 茜」

「あ……」

ち、ちよつと待ちなさいよ蘭子！」

「？」

「わ、私も一緒に行くから……べ、別にあんなのを見たい訳じゃないわよ!」

ただ、今日は放課後暇だったし、一緒に遊ぼうかなって思っただけだから！」

「茜……うん! 一緒にホモビ見よう!」

彼女達の青春は始まったばかりだ。



だが学校から離れた所ではあるOLの女性がふらふらした足取りで歩いていて、その手首からは血が滴っていた!!

「彼氏と別れた……辛い……浮気とか最低。」

どうせうちは遊びだったってことでしょ。今リスカした。血がきれい。

この光景を8メガピクセルカメラで撮りたい。撮った写真をiCloudで共有し

たい。それができる。そう、アイホオンならね」

しかし女性は結構元気そうだった。



放課後、マミと魔法少女候補達は飲食店の店内にいた。

「では魔法少女体験コース第一弾、いきましようか」

「お〜!」

「……」

乗り気な少女2人に対し、数人は暗い顔をしていた。

一応の覚悟はしてきたとはいえ、だからといって死への恐怖が消えた訳ではない。

「準備はいい?」

「ワイは一応これ持ってきました」

そう言っつて傘を持つ。

「打撃武器代わりにはなるかな思うて。というか家にそれしかなかったし……」

なんカスは野球をするのが好きというよりは、野球観戦が好きだったから家にバットなんて物は無かった。

「さやかはどうや?」

「準備になつてるかどうか分からないけど……持つて来たわ! 何も無いよりはマシかと思つて」

さやかは金属バットをカバンから出す。

《悲報》なんカス、なんJ民としての気持ち女子に負けてしまう。

なんJ民と言えばバットだろうに。

「まどかは何持つて来たの?」

「え? えつと。私は……」

まどかは一冊のノートを取り出して、ページをめくつて皆に見せる。

そのノートには、まどかが魔法少女になった姿を想定したまどか自身の絵が描かれていた。

「と、とりあえず、衣装だけでも考えておこうと思つて」

まどかの可愛らしい絵に、さつきまで緊張していた数人もつい穏やかな笑みがこぼれる。

「デュフフｗｗｗｗ」

訂正。クツソキモい笑いだった。

そうして場が和み、雰囲気も良くなった所で4人は出発する。

「なあ仁志」

「ん？ どうした俊彦」

「この間会社でホモビ見てた事皆にバレたって言ったじゃん？」

「そうだったな」

「俺会社クビになったわ」

「当たり前だろ」



「これが昨日の魔女が残していた魔法の痕跡。基本的に、魔女探しは足頼みよ。

こうしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿ってゆくわけ」

今、ワイらはソウルジェムで魔女の居場所を探ってて、あまり人気がひとけのない廃墟の方へと向かっていた。

「かなり地味ですねそれ……」

さやかがそう言う。探索っていうものはコツコツやるものだから仕方ないね♂

「光、全然変わらないっすね」

「取り逃がしてから、一晩経っちゃったからね。

足跡も薄くなってるわ」

しょうがないね。(全く責任を感じていない屑)

「あの時、すぐ追いかけていたら……」

まどかが暗い顔しとる。

「どうやらまどかは自分達のせいと魔女を逃してしまったと思つとるみたいやな……  
「気にすんなや。俺らはまだ一般人なんや。」

無理にどうにかしようとしたら危ない目に遭うだけや」

ワイはそう言つてみたが、まどかの気は晴れてないみたいやな……

「マミさん、ごめんなさい……」

「いいのよ」

マミさんが優しく子供をあやすように言う。

「うん、やつぱりマミさんは正義の味方だ！」

それに引き換え、あの転校生……ホントにムカつくなあ！」

「本当に……悪い子なのかな……」

「それは……まだどつちにも言い切れんな……」

ワイは自分でも珍しく感じるくらい真剣に悩んどつた……



「エレベーターってゆうのわ……英語で『elevator』」

逆から読むと……『rotavale』

そう……ロタベレ……マヂ意味分かんない……もうマヂ無理……エスカしよ  
そう言つて女性は建物をエスカしていった。

「ねえ、マミさん。魔法の居そうな場所、せめて目星ぐらいは付けられないの？」  
確かにさやかかの言うように目印くらいはないと、こんな探索やつてられへんわ。  
「魔法の呪いの影響で割と多いのは、交通事故や傷害事件よね。」

だから大きな道路や喧嘩が起きそうな歓楽街は、優先的にチェックしないと」

マミさんの言葉を自分的に解釈すると、怒りや悲しみみたいな負の感情が多いと魔法  
に取り憑かれるみたいなきなかなかな？

そうなるよ、なん丁民とか毎回呪われてそう。

「あとは、自殺に向いてそんな人気のない場所」

樹海のことですかね……一回樹海観光に行ってみたいけどなくワイもなく。

「それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。」

ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる」

それを聞いてさやかが不安そうな顔をしとる。上条君のことを考えてたんやろか……確かに上条君は今病院におるし、魔女なんていてたらちゃんと思げられるかどうか……でもさやか、今の上条君に恋するのはやめといた方が

「かなり強い魔力の波動だわ」

「近いかも」

そう考えるとママさんが近くに魔女がおると言い出す。

……ち、ちよつと待つてくれ心の準備が……

「間違いない。(´・`・´)よ」

「あ、ママさんあれ！」

さやかが指差した先には、屋上で飛び降りようとしてる女性がおった！

「もうマジ無理。 彼氏とわかれた。」

ちよお大好きだったのに、ウチのことわもうどおでもいいんだって。どおせウチは遊ばれてたってコト、いま手首灼いた。

身が焦げ、燻っている。一死 以て大悪を誅す。

それこそが護廷十三隊の意気と知れ。破道の九十六『一刀火葬』

屋上で女性が身を乗り出しながら何か呟きながら、手首が燃えた状態で建物の一番上から落ちてくる！

なんで手首燃えてんの!?

「フア!? やべえよやべえよ!」

しかしマミさんは即座に変身してリボンを操り女性を受け止め、魔法で水を出し消火もさせる。

はえ〜すっごい早い行動……やりますねえ! (惜しめない賞賛)

「魔法の口付け……やっぱりね」

マミさんはOLの女性の首元を見てそう言った。

魔法の口付け?

……にしてもタトウーとか趣味悪いなこのOLの人(分かってない)

「マミさん、この人は?」

「大丈夫気を失ってるだけ」

「いくわよ」（野獣お嬢様）

マミさんの呼び掛けと共に、ワイらは建物の内部に入ってしまった。

内部に入るとマミさんが、さやかかのバットとワイの傘を魔法で超強化した。

「うわあ〜……どうなってるのこれ？」

「すごい……」（サーバルちゃん）

「これもう分かんねえな」（思考停止）

「気休めだけど、これで多少身は守れる筈よ」

マミさんの言う通りや。自分の身は自分で守ることは出来るはずです（至言）

「絶対に私のそばを離れないでね」

『はい！』

りんごっぽい王冠の印がついてある魔女の結界の中に皆が入っていく。

（王冠というか、なんかケツっぽい）

クツソどうでもいい考えは置いといて、結界の中にワイも入る。

中を歩いていくと早速

「フア!？」

魔女の使い魔が現れたけど

「大丈夫？ 南君」

マミさんが銃を発砲し、消し去った。

「た、助かった……」

安心して腰が抜けそうになる。

気を取り直し、皆で魔女の方へと進んでいくとまた使い魔が現れる。

「うわっ!! 来んな！ 来んなー!!」

「やめちくりー!!」

マミさんに超強化してもらった傘とバットを振り回すとバリアが出て来てワイらを守ってくれた。

「あゝいいっすねゝゝこれ」

そうして使い魔をマミさんが蹴散らして進んでいく途中、マミさんがワイらに質問する。

「どう？ 怖い？」

「なんてことねっすよ!」

「怖いけど……でも……」

さやかとまどかはある程度落ち着いてるみたいやがワイは……

「い、いや全然そんなこと……まあふたいたいは……（意味不明）」

落ち着いて返答しようと思つたら、だいぶ震え声になつてもうた……なんか訳分からん事も言つててだいぶ情けない。

「頑張つて！ もうすぐ結界の最深部だ！」

そうこう言つてる間にもう魔女の所まで来たみたいや……

ど、ど、ど、どうしよう……使い魔でアレつて事は、魔女は凄く強い奴ちやうんやろうか……

そんな奴を相手にするつて事はマミさんでも万が一のことが……

もしマミさんがやられてもうたら……次は……ワイらが……

……契約はしたくないけど、殺されたくもない……

けどやっぱり……

頭の中で色々考えていると、ついに魔女の所までついてしもうた。

扉が開けられ、魔女が姿を現す。

その魔女の見た目は……顔に当たる部分が葉が溶けかけたような感じで、体は人間の血管が剥き出しになつたようで、背中からは蝶の羽が生えており、大きさは20mはあろうかというクツソおぞましい姿をしとつた。

「見て、アレが魔女よ」

「うわっ……」

「マミさん……あんなのと……戦うんですか?」

「フア!? クツソキモいやんけ!」(自分は棚上げ)

「なんであんなんが魔女って呼ばれとるんや!」

「魔女って言ったたら……魔女って言ったたら……エロいお姉さん!! だろうが!!!」(サ  
ンジ並みの感想)

「アレはメスだからだよ。」

「魔女になって人に害を及ぼすのは全部メスなんだ」

「はえ〜」

「専門家のキュウベえが言うからにはそうなんやろな。」

「大丈夫。負けるもんですか。貴方達は魔法少女がどんなものかしつかり見ててちよう  
だい」

「そう言つてマミさんは魔女の所まで飛び降りる。」

「マミさん……あんなん相手にして怖ないんか……?」

魔女の正面に降り立ったマミに、まず魔女が先手を打ち、人間が簡単に潰れるくらい大きい椅子をマミに向かって投げる。

マミは動揺する事無く、魔法で出来た銃を発砲し、椅子を破壊して頭上に落ちてくるのを防いだ。

次にマミが周りに大量のマスケット銃を召喚し、魔女に次々と発砲する。

だが魔女はその見た目からは考えられない程の速さで飛び回り、銃弾を避ける。

「え……」

その時、マミが違和感に気付き足元を見ると、なんと使い魔が紐状に変化してマミを束縛する。

そのままマミは体を縛る長い鞭のような物に振り回されて、壁に激突する。

「マミさんー！」

マミの劣勢を案じ、さやかは声を上げる。



だが数人は……

(ほう、緊縛プレイですか……大したものですね……)

あの辺がセクシー……エロい！)

性欲に振り回されていた。

先程まで死ぬかも知れない事を気がしていたが、そんなことよりもエロ要素を見つめる方が重要だと思っっている変態だった。

しかし、マミだつてただやられているだけではない。

「大丈夫。未来の後輩に、あんまりカッコ悪いところ見せられないものね！」

マミがそう言うと、大量のリボンが地面から現れ魔女を縛る！

(あ、そっちの緊縛シーンはないわ……)

なんカスが馬鹿な事を言ってる間にマミは巨大な銃を召喚し、必殺技を放つ！

「ティロ・ファイナーレ！」

高速で放たれた弾丸を受けた魔女は消滅し、空間も元に戻る。

そして戦闘が終わり安心したなんカスがマミの元へ向かう。

「すごいでマミさん！ あんたがナンバーワンや！」

しかし、なんカスはマミの傍にあつたある物を拾つてしまう。

「ん？ なんやこの黒いの……」

——それは、グリーンフシードだった……

「!! 南君それには触れちゃ……!!」

触れては駄目だ、と言いかけた所で、なんカス野郎から黒い光が辺り一面に発せられる!

「フア!? なんやこれ!？」

「うわっ!？」

「なにこれ……凄く眩しい……!!」

グリーンフシードを持った瞬間なんカスが黒い影に覆い尽くされ、光を受けた少女3人は目を瞑ってしまふ。

そして光が収まった時、そこにいたのは……

5mくらいはある、なんJ民をイメージしたあの黄色い生物だった。

しかもまどかが魔法少女になった時のあのフリフリの服を着ていた。

「うわあ……（ドン引き）」

「ヴォエー！」

それは世にもおぞましい光景だった。

あまりの汚さとおぞましさに少女3人は色々戻しそうになる。特にママが。

そしてなんJの魔女——ジエイカスが結界を貼り、せつかく元に戻った景色がまた異様な空間へと変わっていく。

『うくん、この球技場』

そして景色が完全に変わると、そこには球技場が広がっていた。

だが、少女達はそんなことについてリアクションする余裕すらなく、目の前のクツソキモい光景に吐きそうになっていた。

「ウプ……もう駄目……」

(口から)で……出るわよ……」

「マミさん!？」

『これはいけない。はつきりいつて今の魔法少女は異常だ』

『裁きを』

だが、マミ達があまりの気持ち悪さにゲロッパしそうになったのも構わず、ジエイカスは攻撃の為に詠唱を始める。

『屋上あんだけど……焼いてかない?』

魔女らしく詠唱した瞬間、周りが火の海になる。

「アツウイ! なによこれ!？」

幸運にも誰も炎には触れてはいないが、周りの熱さに慌てふためくさやか。

魔女の攻撃によりリバースしかけていたマミも正気に戻る。

数人が消え、慌てたさやかがキュウベえになんカスの行方を尋ねる。

「ちよ……ちよつと……!？」

数人は何処に行ったのよ……!？」

「どうやら数人がグリーンフィールドに触れたせいで、数人が魔女のようなものに変えられ

てしまったみたいだ……!」

役に立たない所か足を引っ張ってしまおう主人公。

「ええ!? そんなことが……!?!」

「キュウベえ、どうすれば数人君を元に戻すことが出来るの!?!」

慌ててマミが解決案はないのかキュウベえに聞く。

「今の数人なら、いつもの魔女と同じように倒せば元に戻る筈だよ!」

「とにかく倒せばいいのね!?! 分かったわ!」

そんな事を言ってるあいだにまたやべー魔女が攻撃を仕掛ける。

『ハチゴー（八業）』

相手に八つの業を背負わせる的な名前の呪文を詠唱し、マミの頭上に人間サイズの8個の十字架が落とされる!

「ツ!!?!」

辛うじて避けるマミ。まどかときやかは結界で守られているが、油断は出来ない。

そして魔女がすかさず次の詠唱をする!

『不幸にも黒塗りの高級車と激突してしまおう』

何処からともなく黒塗りの高級車が現れる!

「おいゴラア！」（本人出演）

そしてママミを轢こうとするが、簡単にクルルアを避けられてしまう。

「チコリータ……」（攻撃を避けられ消えるTNOK）

そしてそのままママミは反撃に転じ、周囲に大量の銃を召喚し一斉に射撃させる！

「これでも喰らいなさい！」

『36発……普通だな！』

シユババババ（走り抜ける音）

しかしジエイカスは走ることで攻撃を簡単に避けてしまう。

『俺は君の20秒後を見ている』（未来予知）

そう、先程ジエイカスは未来予知の魔法の詠唱をしており、その際にママミの攻撃を読んでいたのだ。

「あら……中々やるじゃない……」（KNN姉貴）

自分の攻撃があまり効いていないにも関わらず、不敵に笑うママミ。

必殺技が破られない以上はこの程度でママミが恐ろしさを感じる事はない。

『カスが効かねえんだよ（無敵）』

クツソ生意気な事を抜かすジエイカス。

どうやら元から屑だと魔女も屑になるらしい。

『どうした姉ちゃん、もう終わりか』

そういつてまた詠唱をする。

『この辺にイ、美味しいラーメン屋の屋台、来るらしいんすよ』

すると何処からともなくラーメン屋のおっさんが屋台を引いてマミに突撃を仕掛ける！

「ウエ!?」

流石に動揺し、ラーメン屋に当たってしまふマミ。そのまま倒れて地面を転がってしまふ。

だが、マミも負けてはいなかった。

「レガール・ヴァスタアリア!」

マミが叫んだ瞬間、突然長いリボンが大量に現れジエイカスを縛る!

『ヌツ!』

「甘かったわね、さっきの弾丸に仕掛けていたのに気付かなかったの?」

そう、実はマミはさっきの36発に魔法を付与し、その弾丸をリボンに変えていたの

だ！

魔法を使ったりリボンでジェイカスを縛っている間に、マミは反対方向へ向かう！  
そしてマミはジェイカスの背後バックに回り込む。

そう、つまり背後ケツを取ったのだ！

「背後がガラ空きよ？」

『ケツとかは……勘弁して下さいね（棒読み）』

自分が有利な時はイキつてた癖に、不利になると急に弱腰になるジェイカス。

だが、しかしジェイカスも諦めてはいなかった！

『爆砕かけますね〜』

ジェイカスは魔法で拘束しているリボンを爆破させようとする！

しかし……

「残念だけど、もうこれで終わりよ」

そしてマミが大型の大砲を召喚し、必殺技を放つ！

「ティロ・ファイナーレ！」

『だから痛てえつつつてんじゃねえかよ（棒読み）』

そう言いながら必殺技に当たった魔女は消滅していった。



そして魔女がいた所に気絶している数人かずひとが現れ、全てが元通りになる。その後当然数人は焼き土下座した。



それから4人は自殺しようとしていたOLの女性の様子を見に行く。

女性は未だに気絶していた。

「大丈夫ですか？」

ママが気絶していた女性を起こす。

「あ、あたし……なんてこと……あ……あんな……」

女性は正気でなかったとはいえ、自殺しようとしていた事に青ざめた顔をしながらママに抱きついた。

「大丈夫……少し悪い夢を見ていただけですから……」

しばらくして女性の様子が元に戻った。

「ごめんなさい……あたし、なんだか正気じゃなかったみたい……」

「迷惑かけて本当にごめんね？」

「いえ、……あまり人気ひとけのない所に行かないで下さいね？ 誰も気づけませんから」

「うん、ありがとうね……ほんとに」

そう言つて女性は自宅に帰つていく。

(やつぱりマミさんは一流だよなあ……ワイなんか足元にも及ばんわ)

当たり前だろうカス野郎。

(わ……マミさんすごい……)

まどかは可愛い。(真理)

「さてと……帰りましょうか」

「はい、マミさん！」



……までの一連の行動をほむらは見ていた。

「南 数人……まさか魔女になりかけるなんて……」

「貴方は一体……」

（何か悪い影響をもたらさなければ良いのだけど……）

続く。

『イタリアでもホモでありたい』

逆から読むと……

『イタリアでもホモでありたい』

なんでホモなの……いみわかない……

もうマジ無理。今電源入れた

マリカしよ……」

OLの女性は家でマリカを楽しんでいた。

「ブフオオオオオオオオン  
wwwwwwwwwwww  
ヒヤツツツハアアアア  
wwwwwwwwwwww

## 4話 オッサンに夢の中で会ったような……（吐き気）

## 『前編』

現在、さやかは幼馴染である上条恭介の病室の手前まで来ていた。買ってきたCDを渡しに来たのだ。

「はあー……」

だがさやかはすぐには入らず、何故か病室の前で深呼吸していた。緊張しているからだ。

（大丈夫……まどかと数人にも見てもらったし、

きつと恭介も気に入ってくれる筈……）

幼馴染なのに何故緊張しているのか？

その理由はただ一つ、さやかが恭介に恋しているからだ。

（うう……やっぱり恭介と会うってなるとドキドキするなあ……

大丈夫かな？ あたし、なんか顔についてたりとかしてないかな……）

顔をほんのり赤らめながら、手鏡を覗いて身嗜みを整えるさまなど、まさに乙女だろ  
う。

ついでの話だが、野獸先輩は乙女、さやかも乙女、つまりもうこれは野獸先輩〓さやかだろう。間違いない。

そして呼吸を整え終えたさやかは意を決し、病室に入る。

——しかし、さやかは気付いていないが、さよかの恋には一つだけ欠点があった

「おつ、SYKじゃーん。おつすお願いしまーす」

——この声は恭介が発した物だった。

「はい、これ」

だがさやかは恭介の明らかに変な口調を特に気にせず、CDを渡す。

「ありがとナス！ はえくすつごい。SYKはレア物を見つける発掘者か何か？」

「あつはは、そんな、運がいいだけだよ。きつと」

笑って返答するさやか。

またついでの話だが、野獸先輩は学生、さやかも学生。これはもうやつぱり野獸先輩

〓さやかだろう。言い逃れは出来ない。

「そういえば恭介、なんか最近喋り方変わったよね。何かあったの？」

そう、気づけばいつのまにか恭介はあのクツソ汚い喋り方——淫夢語録を喋る淫夢厨

になっていた。

「いや、特には……（理由）ないんですけど、まあ思春期だし多少（の口調の変化は）ね？」

「それより早速このCD聴きませんか？ 聴きましょうよ！」

そう言つて恭介はCDの音楽を片方のイヤホンで聴き始めた。

「この人の演奏は本当に凄いなあ……SYKも聴いて、どうぞ」

そうして恭介はさやかにもう片方のイヤホンを手渡す。

イヤホンのコードは短く、自然に2人の距離は縮まつていく。

恭介の顔が間近になり、さやかはさらに顔を赤らめる。

（うわわ……恭介の顔がこんな近くに……）

とどどどどうしよう……）

心の中であつて乙女になつていくさやか。

やっぱり野獣先輩じゃないか（憤怒）

2人が聴いているクラシックの曲にあつた、ゆつたりとして心地よい時間が続いているように思えたが、恭介は涙を流していた。

そう、それは今となつてはもう――

とどかぬ想い

—その後、さやかが恭介の病室を出て数十分が経った後—

今ワイは恭介君の病室前まで来とった。

さやかと別行動を取った理由はもちろん、さやかが恭介君に恋しているから、二人つきりにしてやりたかったんや。

ワイと恭介君は結構仲の良い友達って感じで、今もこうして見舞いに来ていた。

そしてワイは病室に入る。

「恭介君、これ持って来たで」

ワイはさやかとは別に持ってきたCDを渡す。



「ありがとうナス！ これって……モーツアルト？」

「ドビュッシーなんだよなあ……」

仲の良い友達ではあるんだけど、でも正直、最近あんまり恭介君に会うのは気が引けるんだよなあ……

何故ならその理由は――

「数人、盛り合おうぜ」

「ちよ、いきなり何言ってるんですか恭介さん！ やめて下さいよ本当に！」

「いいだろ数人、いやKZHT」

「（よく）ないです」

そう、恭介君は淫夢厨というだけでなく、本当のホモになっていた。

だからノンケのワイには会いたくない。

そして恭介君は何度断られても諦めずにホモセ〇クス、通称ホモセを提案する。

「仮面ライダーなんだろ？（意味不明）」

「違うんだよなあ」

「大丈夫大丈夫、ヘーキヘーキ、痛みは一瞬だけだから」

「ダイエンドかな？」

ダイエンドは仮面ライダーだけど、ホモであるKMNライダーと純粋な子供の味方で

ある仮面ライダーと一緒にしちや……駄目だろ！（マジメ君）

「後は気持ち良くなつてヨガつて、パパパツツってイツて、終わり！」

「ホモ以外だと痛みにはかならないと思うんですけど（名推理）」

「お前ノンケかよお?!」（驚愕）」

「どうしてホモである事が普通みたいになつてるんですかねえ……」

早く精神病院の方に叩き込まないと（使命感）

どうしてホモはこんなに早ちとりしややすい性格なのか。

「やらないか♂。やりたい。いや、やらせる（三段活用）」

「やめてくれよ……（絶望）」

もうやだこの人……頭おかしい……

「ん？ 病院の中庭に何か落ちてる……なんだろう、見に行ってみよう」

「どれどれ……これは……ノート？ 英語で文字が書いてある……」

DEATH<sup>デアス</sup> NOTE<sup>ノート</sup>、直訳で……分からない」

「どうせ書いた奴も分かってないんだ、プツ」

「中身も全部英語か。面倒どころの騒ぎじゃないな」



——話は戻り、恭介の病室にて——

「エツチな看護して下さい！」

「それは女性の看護師に頼んで、どうぞ」

まだホモのガバガバ交渉は続いていた。

「愛のパワーで僕の病気を治してください！」（池沼大声）」

「やめたら人間（辛辣）」

公共機関の敷地内にも関わらず、ホモがクツソ迷惑な大声を出す。これには流石にワイもキレて一瞬「こいつほんとひで」と思う。（いつもネット上ではキレてるが）

「はあ……恭介君、何もバイオリンが弾けないからって淫夢に逃げ込むことないやろ」  
ピクツと恭介君の体が一瞬揺れる。やっぱり自分でも分かってるんやな……

「……やめてくれ。今の僕にはこれしかないんだ」

口調もいつのまにか素に戻っていた。

恭介君は自分の口調が変化したことを淫夢を知らない人には『自然と口調が変化した』と説明しているが、淫夢を知っている人には分かる。原因はホモビだ。

恭介君は昔からバイオリン一筋な性格で、今までの人生を全てバイオリンに捧げてきたと言つてもいい程の情熱があり、そこまでの努力をしてきた。

最早それはバイオリン依存症といつても良い程で、彼はバイオリンを弾く事でしか生

きる意味を見出せなかった。

「数人君、僕は淫夢に感謝しているんだ。

事故に遭ってからバイオリンを弾けなかった時、とてつもない絶望を感じたよ……

それまでは楽器を演奏する事だけが楽しい事だと思っていたんだ。

逆に言えば、音楽以外に『楽しい』という想いを感じられなかった。

だから、もう一生演奏出来ないかもしれないって言われた時は『僕の人生はここで終わりなんだ』と思った」

「そしてある時僕は淫夢に出会った。最初は『なんだよこの汚い屑どもは……醜すぎて吐き気がする』って思ったね。

でも今は違う。

世の中はまだまだ同性愛の差別が残っている。なのにホモビに出てた人達はノリノリでホモセを楽しんで、棒読みの演技・ガバガバの脚本で金を稼いでいる。

なんであの人達は恥ずかしくないんだ？ そんな恥を晒すくらいなら出なければいいんじゃないのか？ そんな疑問があったんだ」

恭介君はいつになく真剣な顔をして語っていた。

「でも考えてる内に気付いたんだよ……ホモの人達はただ世間に醜いサマを晒したんじゃないんだ！

あの人はホモっていう悩みを抱えていた！ 同性愛の差別に悩んでいたんだ！

そこであの人はきつとこう考えた！

『自分達と同じく悩んでる人達がせめて胸を張って生きていけるように、まずは自分達が胸を張ってホモビに出演するんだ』って！」

「僕はその姿勢に感銘を受けた……」

それと同時に『僕はなんて愚かな奴なんだ……ホモビの人達は自分を犠牲にしても周りを勇気づけてるのに、僕は演奏が出来ないくらいでこんなにくよくよ悩んで、小っちゃい奴だ』と思わされたよ……」

「だから僕はホモになることを決意した。あの人の苦しみを少しでも背負ってあげたい。」

あの人のような素晴らしい存在にちよつとでも近付きたい。

そう思ったから僕はセリエAのスター選手に憧れるよりも、『ホモビ俳優』に憧れるようになったんだ！」

そう語る恭介君の目はダイヤモンドのように固い決意を秘めた瞳だった。その目を見て『ダイヤモンドは砕けない』……そう思わせてくれる程に、美しい目をしていた。

……でも恭介君、一つ言わせてもらおうとホモビ俳優の人そこまで深く考えてないと思う。

「……それで、今は楽しいんか？ 恭介君」

「もちろん！ あの人達の口調を真似られるなんて淫夢語録っていうのはとても素晴らしい文化だよ」

「恭介君はバイオリン弾けんでも、淫夢があればええんか？」

「……正直言つて、やっぱりまだバイオリンは諦めきれない。」

音楽っていう物は僕にとってかけがえのない物なんだ。

だから『これから二度と演奏が出来なくなる』って言われたら……」

恭介君の顔は大分暗い顔だった。淫夢という支えがあつてもバイオリンが無くなつたら、恭介君は絶望を感じてしまうだろう。

事実、恭介君は幼い頃からバイオリンを弾けば褒められ、それ以外のことをやるとあまり賞賛されなかつたらしい。

それが彼の今の人格を作る一因になったのだろう。

「確か演奏が一生出来なくなるのは怖い事だ。」

もし、そうなったら僕は自暴自棄になるかも知れない。  
でも悪い事だけ考えていても仕方がないよ。

だから僕はこれからもリハビリと淫夢視聴をして、精一杯今を楽しむさ」

……恭介君が楽しんでるのなら、ワイには止める権利はない。さつきも言ったけど恭介君はバイオリンの演奏にしか楽しさを感じれなかった『天才少年』なんや。

そんな恭介君がやつと楽しいことを他に見つけられた。

なら恭介君の為に止めるべきじゃない。本当はさやかが恭介君に恋してるから、二人が結ばれたら皆幸せなんやけどなあ……

今日もホモからノンケに戻ってくれないか様子見する為に来たけど、やっぱワイには恭介君を変えることはできへんな……

そもそも恭介君はバイオリンに依存していたのを、今度は依存先を淫夢にすり替えただけに過ぎない。

ワイもネットが唯一の楽しみになってるからよう分かる。

まだ恭介君は依存から抜け出せていない。

ワイも、もしいきなりネットが無くなったとして他に楽しいことを見つけられるかって言われても多分無理だと思う。今までそれだけが楽しみだったみたいなものからなあ……



恭介君もきつと同じだろう。もしいきなり淫夢動画が一斉削除されたら再び気力が無くなっていくと思う。

本当は何かに依存してゐることはアカンことやとは思ふ。

もし依存していた物が無くなると、生きる希望がなくなるってことになる。他とは比べられないくらい辛いしんどいことや。

生き甲斐を失つた人間は脆い。心が絶望と失望に埋め尽くされ、自暴自棄になる。

何もかもやる気が出ず、倦怠感が出て来て他のことに興味を示そうとしない。

急に依存から抜け出すのは、途方も無く難しい。少なくともワイには。

一つのこと以外に楽しさを見つけれず、『それしか生きる意味が無い』と思うようになった人間は、かなりのリスクを覚悟した上で生きていくしかない。

バイオリンを演奏することが生きる意味になっていて、事故でバイオリンが弾けなくなった恭介君はまさに今、そのリスクに向き合っている。

ワイは一つのことには依存するのはアカンと思ってるし、恭介君も多分『このままで大丈夫なのか』っていう危機感はある筈や。

でもワイら二人はそれを分かっているもこの生き方を辞めない。

二人ともただ臆病なだけや。生き甲斐を失くした時、自分が苦しむのは分かっている。でも他にどうにか出来る方法が分からない。だから今は楽しいことだけに目を向

けて、怖いこと、嫌なことからは目を背けてる。所謂現実逃避をしていた。

恭介君は今のままで良いと言っているが、昔と今では何も変わっていないのだ。淫夢が駄目になったら、また同じ嫌な思いをする。

それはワイにはもう分かっていた。でもワイがそれを指摘するにはまず、ワイ自身が依存症から抜け出さなければならぬ。

ワイはその現実と向き合うのが怖くて、恭介君に指摘できないままだった……だがそんなことを考えていると再びあのホモ（恭介）が話し始めた。

「というわけでKZHT」

「ん？」

「一緒にホモビ出演、しよう！」

「おう、やだよ（全力否定）」

なんでBB素材になる必要なんかあるんですか（全ギレ）

「30分で、5万！」

「金の問題じゃねえから！」

30分で5万とかホントに高過ぎる給料だけど、それがホモセならやるつもりねえか

らー！

「お前がホモビ出演を拒むなら、俺がその先まで連れて行ってやるよ！」

「ちよ、マジでヤメロオ！（建前）ヤメロオ！（本音）」

小学生の時、裸のお姉さん見せると顔真っ赤にしてたくらい純粋なノンケだった恭介君を返して！ 返してよ！（サーバル）

「手離しやがれホモ野郎お前コラ……ホモビ会社とか絶対行かねえから！ ていうか力強くない!? お前手怪我してたよな!？」

「ホモのパワーは世界一」

「訳分かんねえ……！ 離せ……流行らせコラ！」

「男のロマンの合体が出来るから……合体出来るから安心！」

「求めてないって……おいなんだお前男の乳首触って喜んでんじやねえよお前……ドロヘドロ！（名作）」

———こうして大乱闘が続いたとか続いてないとか（曖昧）

— 数人が病院から帰った後 —

様々な人がバラバラに病院の外を歩いていた。

全員様々な表情をしながら、せわしなく動いていた。

「やっぱりうちのお父さん大分ボケてきちゃったわねえ……」

「うん、最近は『ポツチャマ』とか『そうだよ』しか言わなくなってきたり、今日みたい  
に『チラチラ見てただろ』なんて謎の因縁をつけてくることもあるもんなあ……」

病院に親を見舞った後、家に帰ろうとしていた夫婦もいれば

「ちよつとイキ杉下さん、こんなところ、今回の事件と何か関係があるんすか？」

「亀頭山君、ここから匂いがあるんですよ、何でしょうこの匂いは？ んん？ これは……精〇、〇液、ザーメ〇、ザ〇汁、キ〇タマ汁、赤ちゃん製造ミルク……さては、犯人がち〇ぼこシコつてたに違いありません！」

事件の捜査の為に調査をしに来た二人組人材のの舞場刑事もいたし、

「あああああああ←あああああああ→！ ああ！」

「井上君！ なにやっつてんだ！ 病院に戻ろう！」

患者と医者もいたが、

誰も病院のすぐ近くの柱に刺さってあるグリーンフシードに気づいていなかった……

—— 運命の分岐点はすぐそこまで来ていた ——

続く

## 5話 オッサンに夢の中で会ったような……（吐き気）

## 『中編』

学校が終わり、放課後になった夕方の頃、かずひと数人はかつての後輩である大坊ダイウオと偶然出会った。

だがその場の雰囲気はかつての知り合いを懐かしむ、といったようなもので無く、あまり良くない雰囲気だった。

「先輩……貴方はもうここに戻ってくる気は無いんですか？」

「……言ったやろワイは『はくしんからて迫真空手』はもうやらんと。」

『迫真空手』は人間を倒す為だけのもの。だから人間以外には全く効果はあらへん。むしろ人間以外を相手すると大怪我を負う。

……詳しくは言われへんけど、今ワイらは人間以外の奴を相手せなあかんねん」

そう、数人が言う『迫真空手』とは、人間を研究し尽くす事で相手がどんな技や武器を使おうが、それが人間ならば絶対に倒せる

という人間を倒す為だけに生まれた武術である。それを応用し、人の形をしているモノならば人間以外でも倒すことが出来る。鉄でできたロボットですらもだ。

しかし、その為に人型ではない人間以外のモノ、例えばライオンや象などを相手取つても倒すことは出来ない。人の形をしたモノとしか相手が出来ない。そういう武術なのだ。

だから数人は魔女や使い魔が居ても迫真空手で戦う事が出来ない。

魔女には全く効かない為だ。完全に人の形をした魔女なら数人でも倒すことは出来たのだが。

例えば銃を持った人間がいるとしよう。その時、迫真空手を習った者が銃を持っていて人間を相手にしても勝つ事が出来る。

未来を予測する技『視<sup>み</sup> える視<sup>み</sup>える』で銃口の位置を把握して、撃つ直前で回避するからだ。この程度のことなら迫真空手初心者でも出来る。

では、もしもどこかの弁護士が核ミサイルを発射してきたらどうだろうか？ 答えはどうしようもない。

決してミサイルのスピードに追いつけない訳ではないし、爆発するから近づけないという訳でもない。

なんなら熟練者になると、迫真空手その四<sup>よん</sup>の技<sup>わざ</sup>『超越<sup>ちようえつ</sup>人力<sup>じんりき</sup>』を使い空を飛ぶことも出来、ミサイルと一緒に並行する、といったことも迫真空手ならば可能だ。

もし、人間や人間型の機械がミサイル並のスピードで空を飛んでいるなら、迫真空手



で接近戦をして撃ち落とすことが出来るだろう。

しかし核ミサイルは撃ち落とせない。人型ではないからだ。

魔女というものは人型ではないのが殆どだ。その為迫真空手など魔女の前ではなんの意味も持たない。

だから数人は魔女を倒せない迫真空手はもうしなうと言う。

「だから『迫真空手』が人間以外の倒し方教えてくれるって言うんやったら戻ってもええけどな」

しかし、『魔女を倒せないから迫真空手はやらない』という気持ちも嘘ではなかったが、数人が迫真空手を辞めた根本的な理由はもつと別の所にあるのだが。

「それは……」

自分ではどうにも出来ないことを言われ言葉に詰まる大坊。

しかし大坊は憧れの先輩だった数人にどうしても戻ってきて欲しいと思い、すぐには引き下らない。

「ですが貴方は迫真空手において天才！

今でも多くの人が貴方にまた教えを乞いたいと言っています！」

「大坊」

「はい」

「やめえや……ワイは……ワイはもう迫真空手が怖なったんや……」

数人が苦悶の表情を浮かべながら、絞るように声を出す。

迫真空手が怖くなった理由を思い出したのか、肩が少し震えていた。

恐怖から迫真空手にはもう関わりたくないという気持ちと、迫真空手で楽しく過ごしていた過去を思い出して戻りたいという気持ちがせめぎ合っていた。

「先輩……」

数人の表情を見て、大坊も悲しげな顔をする。だが先に、情けない顔を浮かべる数人に武人として言わなければいけないことがある。

ちなみに『武人』といったのは、迫真空手の試合が既に殺し合いの世界に発展しているからだ。

実際に迫真空手をやったことで死者も1919人は出ている。門下生は1919810人居るので、大したことではないとされているが。

大坊は覚悟を決め、後輩としてでなく、迫真空手流の使い手として数人に気持ちをぶつける。

「……先輩は迫真空手の教え『武<sup>ブツ</sup>知<sup>チツ</sup>覇<sup>バ</sup>』を忘れたんですか！

武力と知恵と覇道を貫く精神！

それが『武<sup>ブツ</sup>知<sup>チツ</sup>覇<sup>バ</sup>』の理念の筈！

今の貴方には覇道を貫く精神がない！」

「う……………」

それを言われ数人は悩んでいた。

昔、数人は迫真空手においてまさに天才の領域にいた。特に努力する事もなく簡単に技を習得し、すぐにベテランの領域に追いついた。

そのため迫真空手をやっていた頃、一度も怪我を負うことはなかった。それどころか相手の攻撃すら全く喰らう事がなかった。

要するに数人は『迫真空手』という戦いの中で全く痛みという物を覚えることはなかったのだ。

『ワイは上級国民や！』

やからお前らにワイを倒すことはできん！ お前らみたいな無能とは違う！』

だが、それが仇となった。「一度も負けたことがない」という事実が彼を調子づかせてしまった。

迫真空手では『実際の殺し合いを想定して稽古をする為、試合でも寸止めや防具は一

切使用せずに戦い、禁じ手の使用も認める』という考えを元としており、出血や骨折などの怪我を負うのは日常茶飯事のことだ。

実際普段からの試合について門下生達が

『931本の骨が折れた』

『ワシの顔中もう返り血まみれや』

『顔曲がってますよ』

など語っており、日夜門下生達が痛々しい傷を作る報告が絶えない。

その痛みは日常ではまず経験することはなく、壮絶な痛みが原因で迫真空手を辞めていった者も多い。

迫真空手を習っている者は普段からそれを味わい、その痛みに耐えることが出来なければすぐに辞めていく。

しかし、数人は最初からあまりにも才能があり過ぎた為、当時その激痛を全く知らなかった。

そのまま一度も怪我を負うことなく迫真空手の道場で功績を挙げていき、遂には道場の全ての人間を倒した。自分と同年代の子供から、何十年も空手をやっているベテランまでだ。

ただしたった一人、道場主である秋吉亮だけは倒せなかった。秋吉は迫真空手流の流

祖であり、同時に世界最強の男だった。

数人は秋吉を除いた道場の人間を倒した時、驕り高ぶっていた。『ベテランの大人すら倒した今の自分に最早敵などいない』、そう考えていた。

そんな考えを持ったまま、数人は秋吉とは初めての試合をすることになった。

『流祖がなんや！　ワイは最強や！（レンゲル感）』

そんなもんすぐぶちのめして一番上に君臨したる！　ワイが神や！』

だが数人もこんなクソみたいな慢心こそあったものの、その強さは侮れない。

『ホラホラホラホラ！　どうした流祖の兄ちゃん！　もう終わりかあ!?』

実際、流祖を相手にしているというのに、意外にも善戦をしていた。（非常に人をイラつかせる態度を取りながらではあるが）

以前、道場の中では秋吉を除いてNo. 1の実力を持つ者が秋吉と試合をしたことがあった。

しかし、その彼ですら秋吉の前には3秒しか立っていられなかった。

だというのに数人は秋吉とも互角に渡り合っていた。全門下生の3歩先を行ったのだ。

——だがそれはそんな風に見えただけだった——

『ガキが……舐めてると潰すぞ』

秋吉は激怒した。あまりにも空手を舐めている態度を取った数人に対し容赦しないことを決めた。

実はその時秋吉は手加減をしていたに過ぎなかった。門下生の中で一番強い数人を相手にして、まだ本気の力を出していなかったのだ。

そして日頃から常に『手加減した状態の秋吉』を見てきた数人は、秋吉の本当の力を測り損ねていた。それが敗因の一因ともなった。

『カスが効かねえんだよ（無敵）』

（フア!? なんでも……ワイの攻撃が全く効かなくなってる!?!）

数人の攻撃を受けながらも、それがなんでもないかのように秋吉は余裕そうな顔をして言った。

しばらく打ち合っていると秋吉が本気の力を解放した。

『今日はお前の腐り切った根性を叩き直してやる。』

……俺が直々に空手を教える……!』

（う……うそやこんなん……師匠がここまで動きした所一度も見なかったのに……）

すると状況は一転、攻勢は秋吉の物となる。それまで数人が秋吉を押しつつあった戦

いが、急に数人が押され始め、数人は段々と後退していく。

『そんなんじや虫も殺せねえぞ！』

（こんな……こんなに師匠が強いなんて……ワイは……ワイは舐めとつた……師匠を……この世の中を……）

『自分より強い奴がおるはずがない』、そう思つとつた……でも……それは間違いやつたんか……）

そして数人が攻撃を防ぎ切れなくなつた時、終わりは来た。

数人が自分の間違いに気付いた時にはもう遅かつたのだ。

秋吉が数人の隙を逃さず、秋吉の一番の得意技『聖剣月』を繰り出した。

聖剣月は手を手刀の形にして、全力を込めて腕を振り相手に当てる技。その一撃は最早打撃では無く斬撃となり、相手を切り裂くことすら出来る。鋭利なナイフが肉を容易く切断するように、人体を切断出来る。

『ウグアアア——！！！！』

その技を数人は受けてしまい、心臓には当たらなかつたが、左胸を切り裂かれ数人は倒れた。

数人が気を失う前に見た物は、『弟子に呆れ果てているが、それでもまだ立ち直ると信

じている』という感情が見て取れる秋吉の顔だった。

そこで怪我を負った時の痛みをようやく知り、怪我をすることに對し過剰なくらいの恐怖を抱くことになった。

今も聖剣月による傷は左胸に三日月の形になって残っている。

今でも数人はその傷を見て、秋吉との戦いを思い出し、恐怖する。

故に数人は秋吉との戦いの後、迫真空手を辞めた。己の恐怖から逃げる形で。

もちろん迫真空手に未練はあった。修行は厳しいが楽しい物だったし、まだもつと高みにいつてみたい。

秋吉のことだって、当時は自分の力を過信し舐め腐っていたが、なんだかんだ2年間秋吉には世話になったのだ。

空手を一から教えてもらったし、旨いラーメン屋に連れて行ってもらったり、落ち込んだ時には励ましてもらったし、旨いラーメン屋に連れて行ってもらうたり、落ち込んだ時には励ましてもらったし。

それに道場で新しく出来た友はいたし、秋吉やその他の大人にも面倒は見ってもらっていた。そんな皆とまた気兼ねなく話がしたい。そう、思っただけはいい。

だがそんな迫真空手の人間達との関係も全て絶った。もう迫真空手とは絶対に関わることの無いように。

「迫真空手がいくら楽しくても、またあんな痛みを味わうくらいなら、二度と関わらない



方がマシだ」。そんな思いを持っていた。

当然といえば当然なのだろう。『迫真空手』そのものがトラウマになっていたのだから。

だが同時に「なんとという情けない姿だろう」とも数人は思った。

迫真空手の理念『武<sup>ブ</sup>知<sup>チ</sup>覇<sup>ハ</sup>』の三点——通称三点バーストが全くない。今の数人には全くない。

今の自分は嫌なことから正面から向き合おうとせず、背中を向けている。

かつての師匠、秋吉がこのザマを見たらきつと「汚ねえ背<sup>ケ</sup>中<sup>ツ</sup>だなあ」と呆れられるに違いない。

数人は秋吉に破れるまではちよつとした趣味としてなんJを楽しんでいた。

しかし、秋吉の聖拳月を受け、体に深い傷を負ってからは現実から逃げるようになんJにのめり込んだ。

それによって、昔の強さのかけらもない、今のごくごく普通で弱い中学生である数人がここにいて、という訳だ。

そして結局数人は後輩である大坊に何も言えず、逃げるようにその場を去ったのだっ  
た……

俊彦「あゝ……今日も就活疲れたなあ……全くあの面接官め……何が『淫夢三章の良  
いところを教えてください』だよ！ 答えられる訳ねーだろそんなもん！

あつ、でも『好きな野獣先輩の呼び名はなんですか？』って質問は良かったなあ。

『これ淫夢のやべーやつじゃんwwww』って答えといたから、アレは絶対受かっただ  
ろうなあ」

俊彦「さて……YouTube（世界的動画投稿サイト）でも見るか……」（PCカチー）  
動画音声「ウイイイイツス→どうもオ、シャムネコでえくす！」

俊彦「この人の動画512810721回再生かあ、凄いなあ……」

えっ！ ちよつと待てよ！ この人無職でYouTube（動画配信者）やってるの  
か！

……俺も今は同じ無職……こんな凄い人に……俺もなれたなら……」

今日もワイらはマミさんの魔法少女体験コースについて来ていた。

「ティロ・ファイナーレ！」

そしてマミさんが必殺技で魔女を消滅させた所だ。

はえへへ、何度見ても凄いつすねへへ

「いやー、やっぱマミさんってカッコイイね！」

さやか of 気持ち分かる分かる……マミさんの必殺技の大艦巨砲主義的なゴリ押し  
良い・良くない？

デカイ敵を小細工とか難しいこと考えて倒すんじゃないやなくて、ただただ純粋な脳筋物理  
パワーで消し飛ばすのは気が狂う程気持ちええんじゃないや。

ああへへたまらねえぜ。

「もう、見世物じゃないのよ。危ないことしてるって意識は、忘れないでお願い  
わ」

他じゃ一生見れないだろう光景にテンションが上がっていると、マミさんに咎められる。ふひひwサーセンw

「あ、グリーンフシード、落とさなかったね」

あ、ほんとや。まどかが言うまで気づかんかったわ。

「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね。グリーンフシードは持つてないよ」

キュウベえがさも当たり前前の事実であるかのように言う。まるでチュートリアルみたいなやな。

……なんかこいつ、自分が知ってる事を必要な時が来るまで全く言わへん事が多いように感じるなあ……。普通知ってることは最初に言うべきだと思うんですけど。（名推理）

特に魔法少女みたいなの、命を懸けることになる奴は真つ先に伝えるべきじゃありやせんか？ チュートリアル係としては失格なんだよなあ。

まあキュウベえが言つてないことは豆知識みたいなものが多いし、大して問題はないけど。（結局キュウベえに騙される無能）

「何か、ここんとこずっとハズレだよな」

さやかか言い方でガチャを連想してしまった。まるでソシヤゲやつてるみたいだあ

……

「使い魔だって放っておけないのよ。成長すれば、分裂元と同じ魔女になるから」

自分に利益が無くても人の為に戦う、か……

ママさんは本当に立派な人やな……

……ワイは……怖くて戦う事も出来てないから……



「三人とも何か願うことは見つかった？」

魔女退治の帰り道の途中、ママが願うことについて三人に聞く。しかし魔法少女候補3人は今の状況がなんの不满もない幸せな物だった為、特に叶えて欲しいことなどない。い。

せめて今の現状に苦しみまくっているクツキー☆声優なら叶えて欲しいことはたくさんあったろうに。

「いや、三人とも全然……」

「まあ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」

（……誰だって命は惜しい筈やからな……ワイだって叶えたい願いはあるけど、一生戦い続けるくらいなら叶わんかった方がマシや……）

数人は迫真空手の一件で傷付くことを恐れるようになった為に、この4人の中では一番戦いを恐怖していると言っているだろう。

「あの、ママさんはどんな願いごとをしたんですか？」

まどかがママに、キュウベエとの契約の時に願った事について聞く。

（あつ、知っていてえなあ俺もなあ）

一般人のまどかやさやかは仕方ないが、あまり語りたくない過去が数人にもある筈だが、こいつは馬鹿なので、あまり魔法少女の願いについて触れてはいけないことに気付いていない。

「……………」

ママは言いづらそうな顔をして黙っていた。それもそうだ。願いごとを話すなら、内容だけでなく、『何故願ったのか、契約する以外に道はなかったのか』という説明も必要になる。

「あつ、どうしても聞きたいって訳じゃなくて……………」

「……………私の場合は……………ただ、迷ってる暇もなかったっただけよ……………契約しないと自分が死ぬ寸前だったから」

「えっ……………」

ママは自分が魔法少女になった時のことを思い出していた。———少女一人で背

負うにはあまりにも辛い過去を。

「後悔しているわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじゃうよりはよっぽど良かったって思ってる」

数人はママミの表情を発言からやつと察した。彼女に何が起こったのかを。

（……そうか……ママミさんはただ『生きたかった』から……

そうするしかなかったんや……

ワイも……もし自分の命が懸かっていたら絶対に契約するやろな……自分の命が惜しいから……）

「だからこそ、ちゃんと選択の余地のある子には、キチンと考えたうえで決めてほしいの。私にできなかつたことだからこそ、ね」

「ママさん……」

（でもママさんはやっぱり優しい……優しすぎるな……

まどかと同じ、誰かの為に行動出来る人間や……

自分のことしか頭にないワイにはちよつと眩し過ぎる生き方してるなあ……ワイは……）

「ねえ、ママさん。願い事って自分の為の事柄でなきやダメなのかな？」

「え？」

さやかが真剣な表情を浮かべて言う。

「例えば、例えばの話なんだけどさ、私なんかより余程困っている人が居て、その人の為に願いたい事をするのは……」

「それって上条君のこと？」

（あつ……（察し））

なんカスはどうしても察さずにはいらなかった。やはりさやかは恭介のことを意識している。

このままいけば、恭介のホモの本性が露わになり、失恋確定演出ルートだ。

「ただ、例え話だと言ってるじゃんか！」

（ちよ、この流れはまずいですよ！ やっぱりさやかの為にも早くホモをノンケに戻さなきゃ（使命感））

そこでキュウベえがすかさず営業タイムに入る。

「別に契約者自身が願いたい事の対象になる必然性はないんだけどね。前例も無い訳じゃないし」

汚い。流石キュウベえ汚い。もう喋ってるだけで汚い。変態糞土方よりも汚い。

「でもあまり関心でできた話じゃないわ。他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと。」



美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？ それとも、彼の夢を叶えた恩人になりたいの？

同じようでも全然違うことよ。これ」

マミは自分が掴めなかった『幸せ』を、せめてさやかだけでも掴んで欲しいと思い、さやかに真剣に考え抜くようにと訴えかける。

「マミさん……」

「その言い方は……ちよつと酷いと思う」

さやかはそう言うが、なんカスはそうは思っていないようだ。

（いや、マミさんの言う事は正しいと思う……確かに自分勝手な話かもしれない……

でもしつかり考えやなアカン問題や。一回しか叶えられやんもん……（その点ではやっぱりキュウベえより優秀なのは）ジラーチっす）」

なんカスの言う通り、ジラーチもドラゴンボールもほぼリスクなしで願いを叶えてくれる。しかも何回もだ。

だというのにキュウベえは『一生戦い続けなければいけない』というリスクを背負わせておきながら、叶えられる願いは一つだけ。しかも個人によって願いに限界がある。

という事はやはりキュウベえは魔法少女を不当に働かせているゴミ屑カス野郎だ。

人に命を懸けさせておきながら、一つの願いすらロクに叶えないなどベトベタン以下

の畜生だ。

「ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなたきつと後悔するから」

「……そうだね。私の考えが甘かった。ゴメン」

一瞬険悪な雰囲気になりかけたものの、すぐに和解するマミとさやか。

やさしいせい

「やっぱり、難しい事柄よね。焦って決めるべきではないわ」

やさしいせい

「僕としては、早ければ早い程いいんだけど」

キュウベえは長いこと生きることが出来るから焦る必要はないと思うんですけど（名推理）

やはりホモはせつかち。

「ダメよ。女の子を急かす男子は嫌われるぞ」

キュウベえはせつかち。ホモはせつかち。

キュウベえはゴミ屑。ホモもゴミ屑。

キュウベえは淫獣。ホモも淫乱。

つまりキュウベえはホモ。

——その次の日——

学校が終わり、まどかときさやかは病院の前まで来ていた。ちなみになんカスは用事があり、家に戻っていた。

「はあ……よう、お待たせ」

王者の貫禄を出しまどかの元に戻ってきたさやか。やっぱり野獣じゃないか（憤怒）  
「あれ？ 上条君、会えなかったの？」

「何か今日は都合悪いみたいでさ。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよね」  
だがしかし、なんてことのない日常は今、崩れ始める。

まどかが違和感を感じ、病院の柱を指差した。

「あそこ……何か……」

「ん、ん？ どうしたの？」

……あつ!? あれは!？」

まどかが指差した先にあった物はなんとグリーンフシードだった。

「グリーンフシードだ！ 孵化しかかっている！」

キュウベえが白々しくいうが、何故病院の柱にグリーンフシードが刺さっているのかといえば、多分キュウベえの仕業ではないだろうか。そうでなくても面倒くさいのでキュウベえのせいにしておこう。

「嘘……何でこんなところに……」

さやかか顔が青ざめる。きつと、この病院にいる恭介が巻き込まれることを危惧しているであろう。

「マズいよ、早く逃げないと！ もうすぐ結界が出来上がる！」

これも全部キュウベえって奴の仕業なんだ（適当）

「あ！ まどか、ママさんの携帯番号知ってる？」

「え？ ううん……」

ちなみにママさんの名譽の為に言えば、彼女はぼっちという訳ではないし、携帯の使い方くらい知っている。

ただ他人と遊ぶ時間があまりないというだけでぼっちにされたママさん可哀想。ちんぽ可哀想。

話は戻り、さやかか病院にいる恭介を守る為にまどかに指示する。

「まずったなあ。まどか、先行つてマミさんと呼んで来て。あたしはこいつを見張ってる」

愛する者の為、病院に残る事を覚悟するさやか。野獣先輩も愛する者の為、犯罪に手を染めることを『決意』した。

やっぱりさやかは野獣先輩じゃないか（憤怒の罪）

「そんな!」

「無茶だよ! 中の魔女が出てくるまでにはまだ時間があるけど、結界が閉じたら、君は外に出られなくなる。マミの助けが間に合うかどうか……」

しかしキュウベえが引き止める程度ではさやかの決意は変わらない。

「あの迷路が出来上がったら、こいつの居所も分からなくなっちゃうんでしょ?」

放っておけないよ……こんな場所で……」

覚悟する野獣先輩（偽）。

「まどか、先に行つてくれ。さやかには僕が付いてる」

さやかに契約させるより、キュウベえ自身が戦った方が良いと思うんですけど（名推理）

「マミならここまで来れば、テレパシーで僕の位置が分かる。」

「ここですやかと一緒にグリーンフィールドを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられ

るよう、ママを誘導できるから」

「ありがとう、キュウベえ」

「私、すぐにママさんを連れてくるから」

早急に戻りますんで（幻聴）



「蘭子……ごめん……今日は一緒に遊べない……もう……ホモビは一緒に見れない……」

「茜……どうしたの？」

「私、彼氏にフラれちゃったんだ……『ホモビを見て笑ってるような奴らとはもう付き合えない』だってさ……そりゃそうだよね……」

「茜……気持ちは分かるよ……でも茜はそれで良いの？」

「えっ？」

「私なら、例えば友達に見捨てられても、親に見捨てられても、ホモビで笑うことを辞めないよ……そこまでの覚悟があるもん。だってホモビが好きだから！」

茜はどう？ ホモビが好き？ 全てを捨ててもホモビを見る覚悟がある？

それに皆が言うからって好きなことを諦めてしまうの？ 本当に周りの人の意見に流されたままで良いと思うの？ もっと自分の気持ちをはっきりしなよ！

「私は……でも……」

「茜、一つ教えてあげる。『覚悟』っていうのは周りに流されてるだけじゃ到底身につかないよ。

『覚悟』とは!! 暗闇の荒野に!! 進むべき道を切り開く事!! だよ!」

「蘭子……ごめん……やっぱり私には無理!」ダツ（その場から走り去る音）

「あつ……茜……」



——一方田所、数人の家——

「ぬわあああん疲れたもおおおおん」

数人の両親は今家におらず、自宅には数人一人だけだった。

数人は椅子に座ってパソコンで何か作業をしていた。

「全くトツチャマめ……何が『810分のBB先輩劇場を作るのを手伝ってくれないか？ 来週のプレゼンまでに間に合わないから頼むよ頼むよ』だよ……」

長過ぎるんじゃない！ しかもこれをプレゼンしなきゃいけないとかトツチャマの会社は大丈夫なんですかね……？」

「おっそうだな」

数人以外には誰もいない筈だが声がした。

「そっだよ（便乗）。全くなんでこんな事を……え？」

数人はとっさに声のする方を向いた。



「オッスお願いしま〜す」

そこには一人の男がいた。

「フア!!????」

数人は驚きのあまり椅子から転げ落ちる。

「おっ大丈夫か大丈夫か」

「う……うせやろ……な、なんであんたがここに……というか実在してたなんて……」

『自分以外に誰もいない筈なのに人がいた』ということも驚いていたが、数人はそれ以上にいきなり現れた男の顔を見て心の底から驚いていた。

「まあ、（魔女とか魔法少女とか居るんだし、これくらいの不思議があっても）多少はね？」

数人の目の前にいる男。

——— そいつは語録しか喋れない男。

イボと黒くてヌルテカした肌が絶望的に臭い男。

淫夢というコンテンツがここまで流行ることになった原因である男。

全国のなんJ民が彼を求め搜索し続けても、遂に正体すら分からなかった男。

う○この擬人化、ステハゲ、ホモビの人、コカコーラ南島、鈴木不服、ノーナの人、ドリー（ファイティングニモ）、後藤象二郎、正岡子規、イキスギ君、夏の字、楽聖、親の顔より見た男、放送事故、ぶちばっち、タド肛門、スーパー遠野ホリダー、技の田所・力の鈴木、数え切れない程のあだ名を付けられた男。

その名も———

「やっぱり俺は人気者ってはっきり分かんだね」

野獣先輩やしゅうせんぱい

そう、野獣先輩に似ている人などではなく、野獣先輩本人が数人の目の前に居たのだった。

## 6話 オツサンに夢の中で会ったような……(吐き気)

## 『後編』

数人かずひとの家に突如現れた野獣。果たして彼がここに現れた真意とは……これは夢なのか、現実なのか……。暑い真夏の夜過熱した欲望は、遂に危険な領域へと突入する。

「い………一体なんでここに!?!」

「菅野美穂くだのみほ(意味不明)」

意味不明な言語を話す野獣。どうしてここに居るかは答えるつもりはないようだ。

「そんなことよりここに居ていいのかあ?」

早く急がないと巴ママが魔女に殺される事になるってそれ一番言われてるから」

いきなり衝撃的発言をする野獣。

「なっ………えっ………ママさんが!?!」

「ヤバイヤバイ………数人早くしろ〜」

煽るように言ってくるう〇この擬人化。

「な、なんでそんなことお前に分かるんや!」

「そもそもお前マミさんに会ったことあるんか!？」

「俺のことはどうでも良いんだよ。それよりも巴マミを助けに行くか行かないのか。それだけが聞きたいんだよなあ……」

あくまで自分語りはせず、数人の『YES』か『NO』かの答えだけを求めている野獣。どこぞのチンチンフェイスとはえらい違いだ。

「助けに行くつていつたつて……迫真空手じゃ魔女は倒せへんねん……ワイにはどうすることも……」

それとも契約して戦えつちゆうんか?……悪いがワイにはそんなこと出来へん……」  
いくらマミが尊敬出来る人とはいえ、数人とマミは会ったばかりの他人だ。まだ友達でも仲間でもない。

そんな他人の為に命を懸けることは数人には出来なかった。彼はそこまでのお人好しでもなければ自分の命を軽く見ている訳でもない。ただ傷つきたくないという思いが全てにおいて、数人の頭の中で優先されていた。

「確かに迫真空手は魔女に効かない。だが今のお前の体の中には能力がある筈だ。与えられた力が」

野獣は真剣な顔をして話す。

「能力……?」

……まさか、今朝のアレは夢じゃなかったんか!」

「そうだよ（肯定）。アレを使えばマミさんを助けることが出来る」

「で……でもなんでワイなんや!　ワイは戦いたくないんや!　お前らがその力を使えばよかつたやろ!　それともなんか、それが出来ない理由があるんか!」

「そうだよ（皇帝ペンギン114514号）。ほんとなら俺だつて戦いたかつた。でも資格がなかったんだ……」

だからお前に力を託したんだよ。戦えよ、仮面ライダーなんだろうお前（意味不明）」

「で、でもやつぱりマミさんが死ぬなんてなんで分かるんや!　普通ならそんなこと分かるはずない……」

もしかしてお前ワイを騙そうとしてるんか!」

人は自分の目で見えた物だけを信じたがるものだ。よく『証拠を出せ』なんて言葉を聞くが、それもその一種だろう。

自分の目で見えた物であれば、それは他人が捏造してわざと見せた物であろうが信じ込んでしまう。単純なようだが、目に映った情報は人にとっては絶大な効果を発揮するのだ。

故に野獣はこう言った。

「……しょうがねえなあ。俺の言うことが信じられないって言うなら、見たけりや見せ

「やるよ」

まるで『証拠ならある』とでも言うように堂々としている野獣。

野獣は「シユー……」と一拍深呼吸と共に目を閉じ、体に気を集めるように集中してから目を見開いた。

そして何かを呟き片手をゆっくり前に突き出す。

「——奥義……『神之御宝』」

野獣が片手を前に突き出して「神之御宝」と呟いた瞬間、数人と野獣の周りの景色が変わる。時間を、空間を。二人は全てを飛び越えワープする。



「えっ?」

数人は呆気に取られた顔をしてしまい、力ない声がふと漏れてしまった。

『体が軽い。こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて』

なんと、数人の目に映るものは自分の部屋などではなく、お菓子の魔法の使い魔とマミが戦っている所であった。

お菓子の魔法『シャルロット』は可愛らしいぬいぐるみのような姿をしており、マミから少し離れた所で大きな椅子に座って使い魔達の戦闘の様子を見守っている。

気付けば数人はいつの間にか、お菓子の魔法とマミが居る結界の内部まで来ていた。離れた場所からはさやかとまどかがその戦いを見守っている。

「えっ……えっ!?なんでワイ、こんな所に!？」

「……………ここはさつきいた所からほんの少し未来の時間軸だ。お前がバマミを助けなかった場合、どんなことになるかよく見とけよ見とけよ」

そう、今いるのはほんの少し先の未来。野獣の技「神之御宝」で時間と空間を飛び越えてここに来たのだ。



『もう何も怖くない』

マミ達は戦いに夢中で誰も数人と野獣の存在に気付かない。

そのままマミは使い魔を蹴散らし、遂に相手は魔女だけとなった。

魔女は大きな椅子に座ったまま、依然として動かない。

『せつかくのとこ悪いけど、一気に決めさせて……もらうわよ！』

マミが魔法でリボンを召喚し、シャルロットの小さい体を拘束する。

魔女はそれでも抵抗せず縛られたままだ。

そしてそのままマミがいつもトドメを刺す時に使う、あの巨大な銃を召喚する。

『ティロ・ファイナーレ!!』

巨大な光の弾丸が魔女に当たり、その体を貫通する。魔女の体が力無く落ちていき、魔女を倒したかのように見えた。

だが。次の瞬間魔女の口から黒く長い、巨大なナニカが飛び出した。先端にはピエロのような顔が付き、飾りのような羽も生えていた。

「え?」

マミは突然のことに驚き対応出来ず立ち尽くしたままだった。そんなことはお構いなしに魔女は素早い動きでマミとの距離を詰める。気付けばもう魔女の顔はマミの目

の前にあり、魔女は大きな口を開けていた。

「あ——」

グシヤリ。

肉を食い破る音がした。

マミは——魔女に頭を喰われていた。ソウルジエムが砕かれ、変身が解ける。魂を失った体はもうびくりとも動かない。先程まで悲しみ、喜び、生き生きとしていた少女はもういなかった。

「え——」

ふと、数人からそんな声が出た。数人の目は限界まで見開かれ、理解できないといった様子で呆然とその場の光景を見ていた。

——誰も、何も出来なかった。

そして繋がりを失ったマミの体は地面に落ちていき、魔女がその全てを喰らっていく。

「ひっ……」

数人はようやく事態を理解した。マミが死んだということ。そして次にそうなるのは自分だということを想像して恐怖で体が震えた。

「これ以上はまずいか……」『かんのみほ神之御宝』

野獣は目の前で人が死んだにも関わらず、あまりにも冷静だった。そして再び『神之御宝』を発動させて、時間と空間を超越する。



——数人の目の前の光景が魔女の結界から、数人の自宅へと戻る。

時間もママが死亡する前まで戻っている。

「あつ……」

——助かった——まどかときよかの心配よりも、戻って来たことの安心感が真つ先に数人の頭から出て来た。震えも収まり、気が抜けて地面にへたり込む。生き延びたという安堵からか涙も出る。

そこに再び野獣が話しかけた。

「分かったか？　これがお前が何もしなかった場合の結果なんだよ。お前が戦わなければバママは死ぬ」

「で……でもやつぱり……ワイにとってはママさんは他人で……」

あれを見たシヨックと『自分は関わりたくない』という後ろめたさで弱々しく話す数人。そんな数人の顔を野獣が殴り飛ばした。

「馬鹿野郎！」

「ガッ!!？」

殴り飛ばされ数人は壁に派手な音を立てながら激突する。

「お前が！戦わないのは勝手だ！けどそうなった場合、誰が代わりに戦うと思う？」

「……」

激昂しながら話す野獣。それに対し数人は黙ったままだった。

「ほむらだ。ほむらは恐ろしい奴に見えるかもしれないが、本当はあいつは優しい奴なんだ。魔法少女達を必死に助けようとしている。今までだって何回もそうして来た……」

（それにほむらは前回のループで、バマミを助けられなかったことに負い目を感じている筈だ……）

だからお前がやらなきや、自分からバマミを助けにいくだろう。

けど、今のあいつじゃバマミは助けられない。

そうなれば、ほむらのことをよく知らない連中はよってたかってほむらを責める

……

お前が!! 戦うしかないんだよ!!!」

「ほむらが……マミさんを……?」

突拍子もない話だが、なんとなく数人には信じられる気がした。ほむらはキュウベエ以外誰も傷つけていないのだから。今の所、だけの話だとしても。

「それだけじゃない。巴マミが死ねば、あの場にいたまどか達も危険に晒される」

!!!

数人はようやくそのことに気が付いてハツとしたような顔を浮かべた。そして気が付くと同時に、数人の顔から焦りが見て取れた。

「マミさんを失ったまどか達は契約するしかない。いや、もしかしたら契約が間に合わずに……」

「あ……アカン……それだけは……!!!」

「じゃあお前がやるんだな?」

「うっ……うう……」

数人は苦悩していた。死にたくない。

だが、まどかを。あの子を失ってこれから生きていく人生はとてつもなく空虚なモノだ。

自分の命を取るか。大切な人を取るか。数人にはどちらも大事であり、はつきりとどちらか一つを口に出すことは出来なかった。

(ま……まどかが……死んでしまうかも知れない……?)

駄目や……それだけはアカン……まどかはワイの心を救ってくれた唯一の人間や……あの子には返しても返しきれない恩がある……

でも……あんな……あんな化け物を相手にしたら……いくら能力があつてもワイが死んでまうかもしれん……イヤや……死にたくない……でも……まどかを死なせる訳には……!)

現実の時間ではたった数秒のことだったが、数人の頭の中では何十分・何時間も葛藤していたかのように感じられた。

現代の日本人、しかもごくごく平凡に育ってきた中学生が自分の命を失うことに恐怖しない訳がない。普通の人間ならば怪物に関わることに自体恐れ、逃避するだろう。それが当たり前である。

しかし、それでも尚数人にはまどかを守り抜かねばならない程の恩があつた。

「クツ……ウウツ……」

数人の顔からは冷や汗が浮かび、呼吸は乱れ、体は震えていた。どちらか一つを選ぶことも出来ない二択を言葉に出すことすら躊躇っていた。

それでも――

「わ……分かった………ワイが………ワイが行く………ワイがやる………！」

弱々しく絞り出したような声で話し、目には若干の涙を浮かべながらも。

その目には一つの決意があった。恐怖が無くなった訳ではない。むしろ数人の脆弱な意思などつつけばすぐに壊れてしまうだろう。

だがそれでも。数人は一步を踏み出したのだった。今まで逃げてばかりだった恐怖に立ち向かう一步を。

「――ふん。それで良い。ママさん達は見滝原総合病院に居る。魔法の結界も通れるようにお前に力を与えておいた。急がないと死ぬぞ。何やってる、とつとと走れ!!!」

「!!!わ、分かった!!!」

野獣にそう言われ、やっと数人は家を飛び出して走り出した。

「……まさかあんな奴に力を与えなければならぬなんてな……クソツ!! どうして俺じゃダメだったんだ……! どうして……!!」

一人残った男の嘆きは誰の耳にも届かなかった……



こうしん恒心学校6年5組 からさわ唐澤高四郎たかしろう  
 彼はとあることで悩んでいた。

「授業中に出したら中学生生活終わるナリ……」

そう、お察しのアレだ。ウンチーコングだ。このままでは彼の体からウンチーコングが出てしまう。

しかし周りから『尊師』とすら呼ばれる程頭の良い彼は、常人には思いつかない方法





りなかったという訳ではない。

——ただ、勢いが凄まじかった。それだけのこと——

「ふっ……当職の……負けナリね。」

高四郎は自分の作戦が上手くいかなかったのに、どこか清々しい気分だった。

いつしか雨はやみ、そこには虹がかかって晴れ晴れとしている。高四郎の心もそんな空のように爽やかだった。



「ハア、アツ、アツ、アツ、アツ、アツ、アツ、アツ、アツ……」(野獣機関車)

今ワイは病院を目指して必死に走つとつた。

「ハア……ハア……敗北者？取り消せよ！」(走り疲れた末聞こえてきた幻聴)

……見えてきた!! この見滝原総合病院に皆がいるんやな……そして……さつき見た……あの……魔女も……

……アカンアカン!! これから敵と戦うちゅうのにビビつとつたら本当に死んで

まう!!

……さつき見た光景ではあの魔女はマミさんの……頭を喰らった……あんな化け物を相手にすると思うと吐き気がしてくる……さつき決意したばかりなのに……また……ワイは恐怖して……

でも……秋吉師匠も言つとつた筈や……「敵の目の前で悩むな。不安になるな。恐怖を見せるな。敵に隙を与えちまったら最後……死ぬぜ」って……

だから……ワイも……ワイも化け物に立ち向かう以上は絶対に怯んじやいけないや……!!

覚悟しろ……ワイ……怯むな……逃げるな……恐れるな……一步……一步を踏み出せ……!!!

「ハアー……ハアー……!!」

これでもかというくらいに躊躇った末、ようやくワイは歩き出すことが出来た。病院の建物の目の前まで来ると結界のようなものが突然現れた。

「これは……魔女の結界。!! まさか本当に通れるようになったのやなんて……」

魔法少女でも無かったワイが結界を開けるようになったのも……やっぱりこの力のせいなんか……

あのオッサンから与えられたらしい力はいまさつき試した所やけど……ホントにこ

んな力が身に付いてまうなんて……イヤやな……この力のせいでこの先も何か争いに巻き込まれたりしたら……

……いや、考え事は後や!!今はまどか達を助けに行くことが優先や!!!

そう考えたワイはすぐに走り出した。不安を吹き飛ばすかのように、自分に勇気を出すように大声で叫びながら。

「うあああああ!!!」

走り出して魔女の結界の中に突入し、結界内部を駆け抜ける。幸いにも中は一本道だったので何も考えることがなくて助かった。

途中、暗い中を一人で進む恐怖が出るが、別の事を考えて恐怖を紛らわせた。

「クツキーにキャンデイにプリンやチョコレート……なんで道のそこら中にお菓子を象つたような物体が置いてあるんかと思つたが、もしかしてこの魔女はお菓子の魔女か? ハハハ!! なーんてな!!!」

不安を打ち消す為に大声で独り言を言ってみたが、周りに誰も居なくて良かった。もしこんなバカうるさい独り言を聞かれてしまったら、恥ずかしくて悶え死にするわ流石に。

「……貴方、こんな所まで来て一体何やってるの？」

「ギャアアアアアア!!! 居たアアアアアア!!!」

目の前には何故かりボンで体を縛られた暁美さんが呆れ顔でこちらを見つめていた。

……ちよつと待つて?（関西クレマー）今のクソデカ独り言聞かれたよね? ヤバ

イ絶対聞かれた!!!

ア——!! ア——!!!（発狂）

ア——!! 死にたい!!! ヤバイヤバイ恥ずかしい!!! 死にたい!! 皆に内緒でこつ

そり書いてた厨二ノートを親に見られた時並に恥ずかしい!!! 死にたい死にたい死に

たい!!!

あまりの恥ずかしさに悶え転げてしまった。

「ホントなんなの貴方は……（呆れ）」

クソみたいなバカ（語彙力なし）をやったせいでさつきよりも暁美さんに呆れられた。はつず。恥。死にたい。

「……ていうかなんで暁美さんは体を縛られてるんや？Mなの？ドMなんか？」  
「違うわよ!!!」

……暁美さんみたいな美少女が体を縛られてるのって、緊縛プレイみたいで凄いエロい。エッチコンロ点火！ エチチチ／勃／

「そうじゃなくて……今は理由を説明してる暇はないわ!!南数人!!! 今すぐこのリボンをほどきなさい!!!」

「えっ!?!」

いきなりリボンをほどけと言われたが、そんなもんワイ一人では無理や。時間がかかり過ぎる上、ぎつちり締められてあるからほどくの自体難しいかもしれん……

……それに、ママさんから「暁美さんは信用出来ない」とも言われとる……

でも……暁美さんは何故か……信用出来る……気がする……ホントにどうしてかは

分からないけど……

だからワイは暁美さんを助ける為、コイツらに任せる事にした。

「お前ら!!! 任せたで!!!」

「二」おう、任せとき（ニツコリ）「二」

「えっ!! ちよつと、この人達はどこから現れたの!？」

南 数人!!! 待ちなさい!!!」

なにやら騒いでる暁美さんとあいつらを後にして、ワイはまどか達の所へ真っ直ぐ走っていった。

■ ——— 魔女の結界最深部、お菓子の魔女の部屋 ———

数人がマミ達と合流する前に、既に戦いは始まっていた。

「せつかくのとこ悪いけど、今日は一気に決めさせてもらおうわよ!!!」

お菓子の魔女であり、人形のような姿をしたシャルロットが出てきた瞬間にマミはマ

スケツト銃を鈍器として構え、目の前に来たシャルロットを思いつきりその鈍器でぶん殴った。

殴られたシャルロットが吹っ飛んだが、マミは回避する隙すら与えずに吹っ飛んでいったシャルロットに弾丸を連続で放つていく。まともに喰らったシャルロットは地面に落ちていき、動くことすら出来ない所をマミにゼロ距離から射撃される。そしてリボンで拘束され天井まで持ち上げられるが、それでもシャルロットは無抵抗だった。

シャルロットは出現してからずつと動かない。不気味とすら思える程に。

しかし先程まどかに「一緒に戦う」と温かい言葉を貰って、マミは気分が高揚している。気分が高揚した人間はどこか集中が欠け、全体を見渡す事を忘れてしまう。

それに加えて先程の怒涛の攻めからも分かるように、マミには「早く戦いを終わらせて、ゆつくり時間を過ごしたい」という気持ちがあった。

それ故にシャルロットの様子が不自然であろうが、マミは気にしなかった。マミにとつては些細な事だからだ。

天井を持ち上げられ、身動きも取れないシャルロットにマミはなにも不安に思うことなく、そのまま『ティロ・ファイナーレ』の発射態勢に入る。

「ティロ・ファイナーレ!!!」

轟音が炸裂し、シャルロットの体に大穴が空く。



「やった!!」

その場にいる誰もが勝利を確信した。マミも魔女を倒したものと思い、気を抜いていた。

だから。

「えっ」

シャルロツテの中から現れた恵方巻きのような姿の魔女を、マミはどうすることも出来なかつた。

このままではまた、あの時と同じくマミはシャルロツテに食い殺されてしまう。

「あ……」

誰も動くことが出来ず、なんの抵抗も出来ずにまたあの悲劇が繰り返される

「ホ——ムラン!!!」

筈だった。

気付けばマミの目の前には、男がバットを持って立っていた。その男は全身黄色い肌で、顔は不自然な後ろ髪飛び出た目に尖った口という外見の特徴を持っていた。

男がバットを振り、魔女に当てる。その勢いで魔女は吹き飛んでいった。

「え．ええええええ!!!?」

突然現れたその男の顔はカッパのようにも見え、口は開きっぱなしで、顔の表情も感情を見る者に今ひとつ感じさせない。いかにも間抜けそうな顔をしていた。

しかし、我々は!! 我々はこの男を知っている!!! いや、この特徴的な黄色い肌と池沼のような顔を知っている!!!

i  
( i

— — ( ) ( )  
— — 多 と

— — ノ ー、

(ミ)、  
! フ /  
? \ 三三三  
— /  
( < / ソ )  
[ ] ( 、 、 / )  
[ ] ( 、 、 / )

「ンゴoooooooooooo魔女弱スギイ!!! 自分草いいつすかoooooooo」

そう、その男は——なんJ民だった。

数人ではないし、中身がなんJ民とか、そう言うことを言っているのではない。

イラストでなんJ民として描かれる『やきうのお兄ちゃん』の姿そのものだった。

「ハア……ハア……良かった……間に合ったんやな……」

そこに遅れて数人がやって来た。絶えず走り続けたせいで息も絶え絶えの状態になっていた。

「でも今は……あいつを倒すのが優先やね……!!よし!! やつちまええええ!! 『なんJ民』!!!」

数人がそう叫んだ瞬間、吹き飛ばされ倒れていた魔女の周りに人一人分はある青い空間が次々に生み出されていく!!

我々はこの青い空間も知っている!!

——そう、我々が日頃『BB空間』と呼んでいるものだった。

シャルロットの周りのあちこちに、100は越えようかと言うくらい数のBB空間が出来、そしてその中からバットを持ったなんJ民が続々と現れる!!!

「やれええええ!!!」

——そう、これが数人に与えられた力——『無限のゴミ屑』——なんJ民(とバット)を召喚する能力だった。

現れた全てのなんJ民達がシャルロットテをバットで殴る。殴る。殴る。

「300人に勝てるわけないだろ!!!」

その数およそ三百人。

三百人全員がシャルロットテをバラバラに、しかし休む間を与えることなく殴り付けていた。

その光景は酷いものだった。怯え、逃れようとするシャルロットテの様子にもお構いなく、なんJ民は殴る。

「オラッ!! 死ねっ!!!」

『GYAAAAAAAA!!!』

なんJ民は楽しそうに殴る。シャルロットテはそのたびに暴れ回る。

「くっさ!!! 死ねよ!!!」

『AAAAAAAAAAAAAAAA!!!』

なんJ民は嬉しそうに殴る。シャルロットテはそのたびに苦しむ。

「バットで殴りつけるのは楽しいってのはつきり分かんだね。ワイも参戦いいつすか?」

『AAAAAAAAAAAA!!!』

なんJ民はシャルロットテの反応を面白がって殴る。シャルロットテはそのたびに傷付

いていく。

「酷い……」

まどかはこの光景から目を逸らした。暴力しか無いこの異様な光景から。いくら人を殺す魔女とはいえ、まどかはなんJ民のやり方を肯定出来なかった。

いじめっ子達がたつた一人を寄つてたかつてリンチする事と、今のなんJ民達の魔女リンチと一体何が違うだろうか？

誰かを守る為に武力を使うならば、多少は許されよう。しかし、今のなんJ民は暴力を振るう事を楽しんでいる。

それは日頃のなんJ民のネットリンチと全く同じだ。

ネットで数の暴力と言葉の暴力を振るっていたなんJ民が、現実で数の暴力と身体的な暴力を振るうようやり方を変えただけに過ぎない。

「もう……やめてよ……」

まどかがか細く発した声は誰にも届かなかった……

しかし、今はなんJ民達の行動よりも魔女を倒すことが最優先だ。安全を確保してからでなければ、落ちていて話をすることも出来ない。

「クツツ……危うい状況を、このなんJ民達が数の暴力でなんとかしてくれたい方がいいが、この魔女がしぶとくて中々倒れへん……!!」

今はなんJ民達が魔女に反撃する隙を与える事なくボコリ続けているが、それだけでは魔女を消滅することは出来ない。

ちなみに数人は魔女に襲われないギリギリの範囲内から今の状況を見ていた。それもそうだ。彼自身には魔女と戦う力などないし、そんな勇氣もない。せいぜい自分の操り人形（なんJ民達）に戦わせておきながら、自分は遠くから見ただけに限界だ。

そんな数人の焦りを含んだ声に、「はっ」と我を取り戻したように、先程まで呆けていたマミが動き出した。

「!!南君!!私に任せて!!」

マミは魔女のとどめは自分が刺すと数人に呼びかけた。

「マミさん……分かりました。おい、お前ら!!そこを離れる!!」

数人の声に呼応し、なんJ民達は一斉に魔女から離れ出し、マミはまた『ティロ・フィ

ナーレ』の準備へと入る。

バマミは幼い頃からずっと戦い続けていた戦闘のプロなのだ。今までに死にかけることもたくさんあったし、恐ろしい目に遭うことも一度や2度の話ではなかった。

そんなバマミが今さつき死にかけただけで、トラウマになったり、恐怖で動けなくなることはもうない。彼女はもう、慣れ過ぎているのだ。そういう状況に。感覚が麻痺していると言ってもいいだろう。

準備を整え、射撃態勢に入るバミ。魔女はなんJ民達に殴られ過ぎて動かない。打ちのめされて全身が傷だらけになり、動くことが出来ないのだ。怪我を回復することすらも今はままならない。

そんな無防備な魔女にバミは狙いを定める。

「今度こそ終わりね……」

テイロ・フィナーレ

!!!!!!



『AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
』

!!!!!!!

放たれた巨大な光は魔女に直撃し、今度こそシャルロットを完全に消滅させた。



「ねえ……南君。貴方はあの人達を知っているようだけど、あの人達は一体誰なの？  
どうして急に現れたの？」

「どうやらママはなんじ民について聞きたいようだ。」

「え？ アイツらですか？ アレはワイの……魔法みたいなもんですかね？」

「数人もよく分かかっていない（作者すら分かかっていない）ので、曖昧な答え方になつて  
しまう。」

それに対しマミはより詳しく知りたい為に、次いで質問する。

「魔法って……それは一体どうやって手に入れたの？」

「どうやってですか？ えーと……なんか昨日の夢の中に出てきたオッサンにいきなり与えられました」

「オッサン?!?!」

オッサンといえばオッサン。それ以外に言いようが無かった。というかほぼ白髪の爺さんだ。具体的に白髪の長髪生やして黒い帽子被った糞土方を想像してくれればいいだろう。

「えーと、オッサンが夢の中で……」

---

糞土方みたいなオッサン（浮浪者）「力が欲しいか？」

数人（夢を見てるので寝ぼけてる感じの状態）「力？ あー、あつたらいいよな」

糞土方のオッサン「じゃあ、あげるわ貴方に!!（課長）」

数人「やったぜ」

「みたいな夢だった気が。そつからあのなんじ民達を召喚出来るようになりました」  
「ノリが軽い!？」



誰も気付かなかつたが、魔法少女達と魔法の戦いを見ていた者が一人だけいた。  
「魔女シャルロットを倒したか……そうだ……それで良い……」

もう既に淫夢4章の方も世界レベルで伝わり、あの能力も無事アイツが使うことが出来た……私の計画に支障はない」

その男は——昨日、数人の夢に現れた浮浪者の男であった——

おかしいとは思わないだろうか？

何故ただのホモビデオが世界レベルで広まっていったのか？ 『面白い』というだけならば、他にもあつた筈だ。

何故ポルターガイスト君は発生したのか？

何故野獣先輩は見つからないのか

何故「野獣先輩は女の子」派と「野獣先輩は汚いオッサン」派がいるのか

何故野獣先輩は「うんこの擬人化」と呼ばれるのか

何故「野獣先輩」は一人なのに、「鈴木」「田所」「今田」と見る人によつて呼び名が違  
うのか

何故野獣は遠野の手を払い除けたのか

何故ホモビが始まりだったのか

答えはただの数人<sup>すうじん</sup>だけが知っている

——これは全ての謎を解き明かす物語——